「期待しながらの積み重ね」

大久保めぐみ教会　光田　隆代



地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。　マルコ４・28

現在、農作業をしながら教会学校の奉仕をなさる方は少ないと思いますが、プランターなどで花や野菜を育てる方は多いでしょう。暑さ寒さ、水分や光に配慮しても、発芽や開花、収穫は人の思いのままにならないのが現実です。それでもチャレンジし続けるのは、種の生命力に期待するからです。

同様に、み言葉には神の命が満ちているので、いつ、どこで、どの時期に信仰の芽が出て、どのように育つのかは分からなくても、種をまき続ける者には収穫を期待することができます。福音の種まきは希望の種まきです。

外への伝道は、それぞれの教会が善戦苦闘をなさっています。教会の賜物、地域の特性などを加味しながら楽しい模索ができるように、教会のバックアップ体制や祈りの援軍は欠かすことができません。

それと同時に、福音書の種まきのたとえのように、信仰という良い地を忍耐強く耕す必要があります。クリスチャンホームの子弟たちがほとんどだと言われている教会学校の状況にも、大きな可能性が秘められています。なぜなら、彼らが教会学校の時間だけでなく、家族と共にみ言葉を聴き、祈ることで日ごとに養われているからです。一人の人が育つためには時間がかかり、忍耐も犠牲も必要です。しかし、クリスチャンならではの家庭礼拝や日常生活での愛と赦しの経験が良い地を作るでしょう。この点では、クリスチャンの家庭づくりは大切な現実的課題だと言えます。

今私たちはIT時代に入って変化の著しい環境におり、様々な問題が複雑化する社会に振り回されそうになります。しかし、この世がどのように変化しても、神の前の人の窮状は変わりませんし、失われている魂を求める神も変わっていません。渇いた魂を満足させるのは、神の愛と人の優しさです。み言葉の力に期待し、倦まずたゆまず信仰の地を耕しながら、神のときを待ちましょう。私たちの神は収穫の主です。

牧羊者

目次

巻頭言 …… 1
目次 …… 2
カリキュラム …… 3
教師養成講座「日本宣教の歴史（Ⅱ）」 …… 4
復活≪4／1～4／8≫ …… 17
キリストの宣教≪4／15～5／20≫ …… 29
サムエルと王たち≪5／27～6／24≫ …… 65
年間カリキュラム …… 95
「牧羊者」のご購読・ご利用について …… 96
おわりに …… 96

〔凡例〕

1．原語について…ギリシャ語は㋗、ヘブル語は㋭、アラム語は㋐で表記しています。

2．礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ…「こどもさんびか」、こ改…「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教団出版局）、ホ…「教会学校・日曜学校　子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン…「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ…「ふくいん子どもさんびか」、GS…「ふくいんこどもさんびか2　グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW…「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

キリストの救いを知る

マルコ1・15

●復活

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
4月1日	イースター・進級式	主イエスの復活	マタイ28・1～10	同6節
8日		共におられるとの約束	マタイ28・16～20	同20節

●キリストの宣教

4月15日	イエスの受洗	ルカ3・15～22	同22節
22日	荒野の誘惑	ルカ4・1～13	同4節
29日	弟子への招き	ルカ5・1～11	同11節
5月6日	罪人を招くキリスト	ルカ5・27～32	同32節
13日	母の日 両親に仕えるイエス	ルカ2・41～52	同51節
20日	ペンテコステ 聖霊降臨の約束	使徒1・3～8	同8節

●サムエルと王たち

5月27日	幼な子サムエル	サムエル上3・1～14	同9節
6月3日	ダビデの油そそぎ	サムエル上16・6～13	同7節
10日	花の日・子どもの日 空の鳥・野の花	マタイ6・25～34	同28節
17日	父の日 天の父への祈り	マタイ7・7～12	同11節
24日	ソロモンの知恵	列王上3・16～28	同28節

日本宣教の歴史（Ⅱ）

関西聖書神学校舎監　川原﨑　晃



Ⅲ　プロテスタント教会による宣教

日本におけるプロテスタント宣教が開始された19世紀は、宣教史家ラトゥレットによって「偉大な世紀」とよばれるほど、欧米のプロテスタント教会にとって、多くの点て飛躍の世紀でした。特に19世紀の前半においては、信仰復興のうねりの中で、教派・超教派を問わず、多くの海外宣教団体が誕生していました。その多くが、アジア・アフリカの未伝地を目指していました。そうしたプロテスタント教会の海外宣教の高揚の中で、長い間閉ざされたままの国日本は、多くの人々の熱心な祈りの対象でした。

一　明治期の教会の宣教

A　準備期（一八五九年～一八七三年）

1．宣教師の来日

日本宣教の先駆的な働きとしては、日本の漂流漁民（岩吉・久吉・音吉）の助けを得て、ヨハネの福音書とヨハネの書簡を和訳した、ロンドン宣教会のギュツラフがいます。また、当時の琉球（現在の沖縄）に渡り、激しい迫害を受けながら伝道したイギリス人ベッテルハイムがいます。しかし、本格的な宣教は、一八五八年に結ばれた日米修交通商条約の第八条において信教の自由が保障されたことにより、一八五九年からのアメリカの教会か

らの宣教師たちによってでした。代表的な宣教師としては、ウィリアムズ（日本聖公会の創立者）、ヘボン（米国長老教会より医者として）、ブラウン（米国オランダ改革派教会より神学教育者として）、フルベッキ（米国オランダ改革派教会より英学教授・外交法律顧問として）らがいます。彼らにほぼ共通していることとして、以下の3点が挙げられます。ピューリタニズムに基づくすぐれた人格の持ち主であり、日本人の中には彼らの高潔な人格にひかれて入信する者もいました。彼らの中の少なからぬ者が中国大陸での伝道経験を有し、そこでの教派乱立の反省から、日本においては教派志向を控え、非常に協調的でした。彼らは信仰復興の波の中で日本にやってきたこともあって、その信仰の特色は、単純な聖書主義と熱烈なリバイバリズムでした。

以下の2点が歴史の教訓として語られています。

一つは、宣教師たちが、禁教下の偏見と迫害、官民による看視の中で、日本語の習得に努め、教育医療活動などを通して日本人の中に入り込み、福音の種蒔きをするとともに、結果的に日本の近代化に大きな貢献をしています。このような状況は、今日も宣教師として教会から派遣される際に、キリスト教宣教が公認されていない国々での在り方と同じです。もう一つは、プロテスタント宣教の開始が、ギュツラフと3人の漁民との出会いなどの一見偶発的事情の中に起こったかのようにも見えますが、「欧米キリスト教会の間に祈り求められた長い間の熱心な、インド、中国を中心目標とする福音的教化の事業に随伴する必然的な計画として展開された運動の一翼であった」（石原謙）と言えるでしょう。

2．日本基督公会の設立

宣教開始から13年の間の禁教下において救われた人々と仮牧師バラとによって設立されたのが、日本基督公会（横浜公会）です。その特色は、欧米の特定のミッションの日本支部ではなく、信仰を同じくするすべての日本人を会員として受け入れるという、公同的な教会を形成するものでした。さらに、熱烈かつ単純な福音主義で、生活や実践及び信仰体験を重んじ、倫理的聖潔を強調しました。そして、当時向学心に燃える佐幕派の士族中心でもって構成されていました。なお、このことが、キリスト教は西洋の宗教、インテリの宗教というイメージを、

後々まで植えつけるものとなりました。

ところで、明治政府は、徳川幕府同様にキリスト教禁教政策をとっていました。しかし、日本が条約改正を願う条件として欧米各国は禁教政策を撤廃することを強く迫ったので、一八七三年「キリスト教禁制の高札の撤去」を決めました。それにより、日本に来る宣教師は急増し、宣教は飛躍的に進展しました。しかし、この撤去は積極的に認められたというよりも、やむを得ず黙認したというものでした。また、教会が政府に抗議したとか、市民が信教の自由を獲得するために闘ったといった下からの拮抗の跡はみられません。

B　急成長期（一八七四年～一八九〇年）

この時代の特徴は、伝道地盤の地方や中都市への拡大、伝道の主体が宣教師から日本人若手伝道者へ移行、３バンドに始まる諸教派の形成とまとめることができます（柳田友信）。

1．初期プロテスタントの三大源流

まず「横浜バンド」です。このグループの出発点は、先の横浜公会の誕生に始まります。その中心となったのは、宣教師ブラウンやバラの塾で育てられた士族の青年たちで、植村正久、井深梶之助、本多庸一らがいます。彼らは、宣教師らの影響を受けて、教会中心の基本的な姿勢を保ち、他の群れと比較すると信条や神学を重視する方でした。多くは長老派及び改革教会のミッション所属でしたので、長老制度をとり、後に「日本基督（一致）教会」という、戦前最大のプロテスタント教会となりました。なお、邦人中心の伝道体制が確立していくと、宣教師は地味な脇役を勤めたという点は注目すべきことです（柳田友信）。

次に「熊本バンド」です。一八七一年に設立された熊本洋学校の校長として招かれたのがジェーンズです。熊本郊外の花岡山で奉教趣意書に40名が署名するや、ジェーンズは解雇されて洋学校は閉鎖、学生たちは新島襄によって設立された同志社に移りました。後の「日本組合教会」の教職として活躍した、金森通倫、小崎弘道、海老名弾正らがいます。彼らの特徴は、進歩的・自

由主義的キリスト教とみられ、国家主義的傾向も強くありました。

そして、「札幌バンド」です。北海道開拓のために「札幌農学校」が設立され、教頭として立てられたクラーク博士のもとに「イエスを信ずる者の誓約」に署名した者たちによって始まりました。内村鑑三、新渡戸稲造らがいます。その特徴は、独立主義的・個人主義的・無教派主義的傾向が強くあり「札幌独立教会」が設立されました。

福音の伝達は多分に「人格的」です。初期のプロテスタント宣教師たちの信仰の人格的感化という点に学ぶことが多くあります。

2．成長期の教会

一般歴史からいうと、いわゆる鹿鳴館時代です。この時期、多数の宣教団が来日し、先に紹介した教派以外に、日本聖公会、日本バプテスト同盟、日本バプテスト連盟、日本メソジスト教会といった教派教会が設立されました。あわせて、東京一致神学校（今日の東京神学大学）、同志社、三一神学校（今日の立教大学）、東京英和学校（今日の青山学院）、関西学院などで日本人教役者が養成され、伝道戦線は拡大しました。

また、日本語聖書（元訳聖書）や讃美歌の出版もなされ、全国基督教徒大親睦会の開催という超教派の協力活動も積極的に行われました。

そして、一八三年に横浜で始まった「リバイバル」は、諸教派やミッションスクールにまで及び、日本の教会を飛躍的に成長させました。そこには、日本基督一致教会と組合教会の合同運動の動きも生じたほどのものでした（結果的に不成立）。

この時期の特色として、従来キリスト教と関わりが非常に薄かった上流階層の人々が多数教会に加わり、自分たちの子弟を競ってミッションスクールに入れました。結果、教会は、日本全体がキリスト教化されることを本気で信じたのでした。

C　停滞期（一八九一年～一九〇〇年）

この時期は、一転して極度の不振の時代を迎えます。その時代的背景として、先の欧化主義の反動として国家

主義全盛時代でした。その激流の中でキリスト教排斥の風潮があり（外的要因）、一方では教会内部における自由主義神学の流入にともなう混乱や動揺がありました。

前者に関する顕著な事件が、一八九一年の内村鑑三不敬事件です。「キリストの贖罪によって支えられて初めて個の確立を自覚した人間が、天皇国家の絶対化に抵抗して、その人間の尊厳と自由を示した注目すべき事件であった」（大内三郎）、「結局キリスト教側は相撲に勝って勝負に負けた形となった」（柳田友信）、「この事件は、天皇神格化に公然と反対すれば、その人は内村同様、国賊、不敬漢と罵られ、社会的に追放されることを、日本国民に具体的に教えたのである」（小沢三郎）と評されています。

後者については、ドイツとアメリカから流入された、聖書の無誤性を否定し、イエス・キリストの神性を否定するものでした。これに最も敏感に反応したのは、熊本バンドの人々で、組合教会は大きく動揺し、教会を去る者が少なくなかったのです。まさに、日本の教会の中で破壊的なものをもたらし、伝道の進展を阻害するものとなりました。このことは、伝道の過程においても、教理的訓練がいかに大切かを教えるものです。なお、この時のバークレー・F・バックストンたちによる「松江バンド」の働きは、日本の福音運動の源泉となり、リバイバル的栄光を拝したことは特筆されることです。

D　回復期（一九〇〇年～一九一二年）

先の伝道不振を打ち破ったのは、約2年間全国的に展開された「20世紀大挙伝道」でした。詳細は専門書にゆずりますが、その特筆すべき意義は、教会を著しく都市中心的なものに変えました。その結果、教会の構成員が、都市に住む中産インテリ、ホワイト・カラーの人々、そして学生中心という傾向となっていったことです。

こうして明治期のキリスト教会は、文化的・教育的影響も含めて、日本の社会の一角にしっかりと地歩を占めることとなりましたが、反動期に見られたように、圧倒的な国家権力体制の前に、教会はまだまだ微力でした。

二　大正期の教会の宣教（一九一二年～一九二五年）

大正という時代は、一般歴史から見ると、第一次世界大戦により、日本は好景気に酔いしれ、その結果風紀は退廃しました。しかし大戦が終結するや、その反動として戦後恐慌となりました。また一方では、大正デモクラシーの語に象徴されるように、明治期の国家主義の流れとは異なる理想主義・教養主義・文化主義などの個人主義思想が風靡（ふうび）しました。キリスト教会の側から言えば、この時期は概して宣教は盛んであり、教勢も伸び、キリスト教の社会活動も積極的に展開されました。

1．指導者の世代交代

この時代の特色を一言で言うと、国家志向から個人志向へ、形成から確立または組織化へということができるでしょう。草創期の厳しい明治期をたくましく切り拓いてきた第一代の指導者たちは、召されたり、老境に入るようになりました。

明治期のキリスト者たちは、国家を離れてキリスト教信仰というものは考えられず、特に士族出身の者たちは、儒教的教養と武士道が強くしみこんでおり、彼らはそのような立場からキリスト教を理解しました。しかしこの時代の第二世代の人々は、個人主義や教養主義の影響を受け、個人としての人生の問題の解決をキリスト教に求めようという、人生追求派が多かったのです。また欧米に留学して研鑽（けんさん）を積んだ者も少なくなく、学問的にもより厳密となり、そうした点でも第二世代でした。

2．教派教会の固定化

大正期のキリスト教の特色を教派的な面からいうと、欧米からのキリスト教の移入が一段落し、諸教派がほぼ出そろった時期と言えます。

「日本基督教会」の神学教育機関は、明治学院神学部（自由主義）、東京神学社（準正統主義）、神戸神学校（保守主義で神戸改革派神学校の前身）があり、前2校は合弁して日本神学校となりました（東京神学大学の前身）。この群れの指導者として、高倉徳太郎（たかくらとくたろう）、柏井園（かしわいえん）、多田素（ただしろし）、小野村林蔵（おのむらりんぞう）らがいます。大正期に、教会員が倍加して大きく飛躍しました。

「日本組合基督教会」は、国際協調の風潮の中で、ア

メリカンーボードとの積極的な協力関係が維持されました。各個教会の自立・自治を重んじる会衆主義の立場に立ち、神学的には自由で幅広いものがありました。国家や社会問題に関心をいだく進歩的性格が強い反面、朝鮮総督府と結びついた朝鮮人伝道を大々的に推し進めるという、権力と癒着しやすい体質も見られました。教勢はふるわず、指導者としては大塚節治らがいます。

「日本メソジスト教会」は、ミッションからの自立という課題をもちつつ、監督政治制から次第に協議的に改革されていきました。

「日本バプテスト教会」は、東日本に伝道を展開した日本バプテスト同盟、西日本に伝道を展開した日本バプテスト連盟があり、前者は関東学院後者は西南学院が神学教育機関です。

概してこの時期は、各教派とも、組織化され、学問的になっていく中で、全般的に固定化していったといえます。信仰が観念的になる弊害もありました。

3．全国協同伝道

この伝道活動は（一九一四年～一九一七年）、先の20世紀大挙伝道をしのぐものであり、大きな成果を日本の教会にもたらしました。教派教会が構成単位となり、当時のプロテスタントの主要教派が協力して進められました。企画された伝道プログラムは、大都会のみならず、広く地方の中小都市でもなされ、さらに朝鮮・台湾・中国本土にも及びました。対象別伝道・自動車隊伝道・新聞紙伝道という新たな方法も導入されました。

4．福音派の台頭

この立場に含まれる教会の特色は、聖書の十全逐語霊感の土台にたって、聖霊の臨在と聖潔とを強調し、実に伝道熱心であることでした。多くは、すでに明治期に伝道を開始していましたが、大正期において著しい成長を遂げたのでした。幾つかの系譜を紹介すると以下のようになります。

①「日本伝道隊」は、B・F・バックストンやP・ウィルクスらによって、一九〇三年結成されました。この団体の目的は、特定の教派教会の形成を目指すものではなく、伝道活動と聖会の開催を通して、諸教会に仕えるものでした。また、聖書学校（関西聖書神学校の

前身）を通して、多くの伝道者を養成しました。

②「日本自由メソジスト教会」は、一八九五年に日本伝道が開始され、河辺貞吉（かわべていきち）らによって、一九〇三年に大阪に進出し進展していきました。伝道者の養成は、自由メソジスト神学校（現在の大阪キリスト教短期大学）で行われました。

③「ナザレン教会」は、一九一〇年に京都で伝道が開始され、大正期に教会形成が進みました。喜田川広（きたがわひろし）らの指導者が生み出されています。

④「東洋宣教会ホーリネス教会」は、当初中田重治（なかだじゅうじ）がカウマン夫妻と協力して、東京神田に「中央福音伝道館」を設立した後、もっぱら超教派的な立場で、日本各地に熱烈な伝道を展開しました。また、働き人の養成のために聖書学院（現在の東京聖書学院）を開設しました。四重の福音（新生・聖化・神癒・再臨）を掲げ、7年かけて日本全国に伝道文書を配布完了しました。また、一九一九年にはリバイバルを経験して、驚異的な成長を果たしました。

⑤その他、今日の「アライアンス教会」、「日本同盟基督教団」、「神の教会」、「福音伝道教会」などの母体となる宣教が進められています。

なぜこの時期に、こうした福音派の教会が飛躍的に成長したのでしょうか。一つには、既成の主要な教派が、どちらかというと教会形成に力を注いだのに対し、福音派の諸教会はあらゆる手段を尽くして実に熱心に伝道したことにあります。もう一つには、大正期に入って日本の教会の多くが組織化され、学問的になっていく中で、全般的に固定化していきました。信徒層にしてもホワイト・カラーや学生が多く、ややもすれば信仰体験そのものが平板なものとなったり、観念的なものとなる弊害も生まれました。そうした傾向の中で福音派は、み言葉を直截（ちょくせつ）に語り、生き生きとした聖霊体験を強調しました。そうした在り方が既成の教会の中にあって飽き足りない人々を引きつけるとともに、一般の庶民層にもアピールするものとなりました。とにかく、それまでの教会に違和感や摩擦をもたらしながらも、教会の信仰を主体的なものとして燃やすうえで、大きな役割を果たしました。より積極的に評価するなら、「覚醒（かくせい）の時代」であったといえましょう。

5．社会問題とキリスト教

一般的に言えば、キリスト者は明治の初期から自由民権運動の積極的な担い手であり、また今日の社会福祉の多くの分野で先駆的役割を果たしました。具体的にあげれば、禁酒運動・廃娼運動・孤児救済・結核やツァラアト患者の治療を含む医療活動などがあげられます。また足尾銅山の鉱毒事件のような社会問題に対しても、田中正造や内村鑑三などの多くのキリスト者が取り組みました。大正期において、労働運動の分野におけるキリスト教社会主義者の活動が目立ちました。その一人、賀川豊彦は、常に労働者や農民たちの当時の陽の当たらない人々に仕えることを自らの使命としました。さらに、真正面から社会救済運動に取り組んだ「救世軍」と、その指導者である山室軍平を見落としてはならないでしょう。その信仰的な立場はメソジストの信仰にならい聖潔を重んじ、貧民下層の人々への伝道を目指しました。また、救済活動に対する社会の評価は、キリスト教に対する国民の認識を改めさせるのに大きな役割を果たしたといわれています。

6．再臨運動

これは教派を越えた再臨運動でした。代表的な担い手は、無教会の内村鑑三、ホーリネス教会の中田重治、組合教会の巡回伝道者であった木村清松です。

この時期に再臨信仰が強調された背景として、第一次世界大戦の勃発を通してキリスト教的近代文明の破綻が明らかになり、科学の進歩や合理主義に対する深刻な反省が生じたことがあります。

この運動は、当初は東京や関西を中心に共同の講演会が持たれていましたが、北海道から岡山に至る地域に及び、各地の教会に熱狂的な信仰復興が与えられ、キリスト教会に大きな影響を与えました。しかしこの運動も長続きはしませんでしたが、大正期における警世の意義は非常に大きなものであったといえましょう。

三　昭和期の教会の宣教（一九二六年～一九四一年）

この時期は、福音宣教にとってはかつてなく厳しい冬の時代となりました。戦時色が濃くなり、さらに戦火が拡大していく中で、キリスト者に対する偏見や弾圧は激

しくなり、教会を離れる信徒が増え、求道者も減少の一途をたどっています。特に一九四三年ころからは、キリスト教に対する軍部や警察の圧力が一層強くなり、礼拝もまず宮城遥拝から始めなければならない有様でした。このように、戦時下のキリスト教会のたどった歴史は、かつてない試練の道でした。

1. 神の国運動

このような不安定な世相の中で展開されたキリスト教会による大規模な運動が、「神の国運動」でした（一九三〇年～一九三五年）。この運動は、国際宣教連盟の働きかけを受けて、賀川豊彦の提唱により、日本基督教連盟を通して推進された大規模な伝道活動でした。「祈れよ、献げよ、働けよ」を標語とし、魂の救済と同時に生活の解放をも目指しました。とりわけ、労働者農民層に目が向けられ、大正期の「全国協同伝道」を上まわる、日本の福音宣教史上最大の組織的伝道が展開されました。

この運動には様々な評価があります。

①全国の教会・個人が教派を超えて魂を獲得したこと、キリスト教の信仰と社会主張を明らかにしたこと、世界のキリスト者と協力できたこと、農漁村や工業地帯に進出して伝道の門戸を開いたこと、終始教会を基盤としてなされたことなどは高く評価できます。

②「神の国新聞」という大衆伝道誌を始め多くのパンフレット類が発行されて、文書伝道が大いに用いられました。

③後半は、非常時体制の圧力が強まっていく中で次第に教育的伝道に終わらざるを得なくなりました。確かに、農村・都市福音学校が開設されたり、着眼点としては従来の伝道の反省を踏まえて、極めて注目すべき視点を持っていました。しかし結果的には、ごく一部を除いては、日本の教会が労働者や農民漁民層と結ばれるまでには至らなかったといえます。

2. 社会的キリスト教・学生キリスト教運動

この運動には幾つかの段階があったようですが、「基督教青年会同盟（ＹＭＣＡ）」を母体とする「学生キリスト教運動（ＳＣＭ）」となって展開していきました。いつの時代においても学生は、その時の社会情勢に対して、最も敏感に反応するものであり、ラディカルに行動する

傾向があります。

当初は、従来のキリスト教の個人主義的傾向を厳しく批判したのですが、マルクス主義とは一線を画していました。ところが、一九三一年頃からは、マルクス主義的な考え方が次第に学生の間に浸透していきました。その結果翌年には、ＹＭＣＡはＳＣＭ運動との関係を絶つに至りました。

この運動をどのように評価できるでしょうか。この運動の担い手は、学生・大学教官・青年指導者などのインテリ層でした。彼らが、昭和初期の日本の不安定な社会情勢の中で、「キリスト教の社会的責任」を真剣に追求したことは高く評価できるでしょう。とりわけ、キリスト教の個人主義的体質を批判し、社会問題の解決に乗り出すことを目指すという着眼点は、大切なものがありました。しかし彼らとして本来対決すべき社会悪に取り組む前に、教会の体質批判が前面に出、教会内部の指導者に対して闘争の矛先が向けられました。そして教会から遊離し、母体となったＹＭＣＡとも決別したとき、明確な理論的・組織的基盤を持たなかったＳＣＭ運動は空中分解せざるを得ませんでした。ここで問われたことは、一九七〇年代の学園闘争における学生キリスト者の活動にも受け継がれたことでした。

３．ホーリネス教会のリバイバルと分裂

柏木聖書学院において、一九三〇年に始まり、３年後に頂点に達したリバイバルの炎は、全国のホーリネス教会のみか、福音派の諸教会、海外へも燃え広がりました。このリバイバルを通して、ホーリネス教会は驚異的な成長を遂げました。「クリスチャンたちは、『仰いでは再臨待望、伏しては失われた魂に対する祷告と警告』、また『主がきたりたまわば携挙、時が延ばされば殉教』と励ましあった」（森山諭）と紹介されているほどです。

ところが、一九三二年に中田重治監督が、「聖書より見たる日本」と題する講演及び出版を行った際に、その主張が聖書学院五教授との間に分裂を引き起こしました。中田の主張は、再臨の切迫性を強調するあまり、もはや従来のような伝道をしているときではなく、ただキリストの再臨とユダヤ民族の回復のための祈りに専念することにより、日本民族はユダヤ民族と同時に民族ごと一挙に救われると説いたのでした。後に和協分離となり、中

田を支持した群は「きよめ教会」、五教授を支持した群は「聖教会」となりました。このような事態にいたったのには、何よりも主なる神のみわざによるリバイバルであるとの前提に立ちつつも、中田の中に未分化で同居していた再臨強調の教理と日本中心の民族主義が極端な形で人々に強要されたことにあったと理解されています。「神は人間をば偉大ならしめないために、発展の絶頂から分裂の谷間に導かれた」（日本ホーリネス教団史）とは、意義深い言葉です。

4．日本的キリスト教運動

先の中田重治の主張の中に見られた日本中心主義思想は、時局が戦時色を帯びるにつれて、多くのキリスト教指導者に、日本精神と国体との融合を図る方向が顕著となっていきました。

そのことが最も顕著に現れたのが、組合教会の国家主義的な流れです。組合教会を決定的に方向づけた熊本バンドの精神の中に、もともと国家主義的志向が強くありました。万人に普遍的な宗教意識を究極的に実現したのがキリスト教であるとし、儒教・神道との連続性を説いたりしました。対外的には、組合教会と朝鮮伝道を、朝鮮民族が大日本帝国臣民（しんみん）として日本人と同化する道を開くものとして支持し、推進しました。その立場は、儒教的キリスト教、神道的キリスト教とも呼ばれたのです。ともあれこれらは、非常時局下の国粋主義的風潮の中で現れた偏向したキリスト教運動でした。

5．日本基督教団の成立

一九三九年に、神社を除くすべての宗教団体の国家統制を図る法律「宗教団体法」が成立すると、それまで教会合同の気運があったこともあって、一九四一年プロテスタント教会34教派が一つとなり、文部当局の要請を受けて合同教団「日本基督教団」が成立しました。「われら基督教信者であると同時に日本臣民であり、皇国に忠誠を尽くすをもって第一とす」との宣誓をなし、統理者富田満（とみたみつる）を選びました。太平洋戦争の火ぶたが切って落とされるや、宗教その他のあらゆる分野で統制が一挙に強まり、キリスト教会も戦争体制に組み込まれ、国家に屈従させられていきました。

日本基督教団成立に対する評価は分かれています。そ

れを神の御旨として積極的・肯定的に評価する立場、消極的・否定的に評価する立場、国家の圧力に屈したと認めつつも、なおその中に神の支配を認めて育てていくという折衷的評価です。

ここで、私たちが絶えず吟味しなければならないことは、パウロの信仰姿勢ではないでしょうか。かつて熱心なユダヤ教徒であったが（ガラテヤ1・13）、キリストに出会って百八十度の価値転換をしました（ピリピ3・7）。そのとき彼は、ユダヤ教やユダヤ人を冷静に見つめることができました（ローマ10・2～3）。同胞を愛することにおいて変わりはなかったのですが、その愛する意味・内容が変わったようです（同9・1～3）。

以上のより詳細な説明及び戦時中・戦後のプロテスタント教会に言及することは尽きませんが、紙面が尽きました。

最後に、歴史を学ぶ上で注意すべきは、「回顧」であって「懐古」ではないということです。後退現象としての歴史を学ぶことに意味はありません。歴史を現実から逃避する場にしてはなりません。あくまでも、前進のため、その指針として歴史を回顧し、検証するのでなくてはなりません。以下の図書は参考になります。

中村敏著『日本における福音派の歴史』
大内三郎著『日本キリスト教史』
土肥昭夫著『日本プロテスタント・キリスト教史』

（「牧羊者・二〇〇七年度Ⅳ巻」より再掲）

聖　書　マタイ28・1〜10
テーマ　復活の主による喜び

序論

イースターおめでとうございます。私たちに代わって十字架に死んでくださったイエスは、よみがえられ、私たちに新しい命を与えてくださいました。

（金井信生）

一、「平安あれ」

安息日が終わった明け方、イエスの墓を訪ねた二人のマリヤの前に、み使いが現れ、「イエスはよみがえられた」と告げました。そして弟子たちのもとに戻ろうとする二人に、イエスが「平安あれ」と声をかけられました。

戸惑い恐れながら帰ろうとする女たちに、イエスは「平安」を託されました。弟子たちもまた不安と恐れに閉じ込められているからです。

十字架直前の最後のメッセージでも、イエスは「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える」（ヨハネ14・27）と語っておられました。

言葉そのものは「シャローム」という、ユダヤ人にとって平凡で日常的なあいさつです。しかし、ただ祝福を願う言葉としてではなく、私たちがいだくすべての恐れや不安に打ち勝ち、吹き飛ばすお方が、現実のものとして「平安あれ」と宣言しておられるのです。「光あれ」と主が命じられると闇の中に光が現れました。主によって心にいつも平安をどっかりと据えていただける幸いをおぼえます。

二、御国に目覚める朝を望んで

主イエスの復活は、神の救いの確証です。イエスを見捨てて逃げ去った弟子たちも、さらにはイエスを十字架につけたものさえも、神の前に罪が赦（ゆる）されて新しい命に生かすために、主はよみがえられました。

「恐れることはない」との主の言葉は、よみがえられた主が、これからずっと共にいてくださることを信じる者が、生涯握り続けることのできる約束です。イエスはご自身が経験されたように、私たちが生きていく以上は必ず、別れ、失う悲しみがあり、病や痛みを負う苦しみがあり、ひとりぼっちの思いに沈むことがあることも

知っておられます。

しかし、悲しみは慰められる、苦しみや痛みはいやされる、あなたは決して孤独ではない、わたしが共にいるし、あなたを助ける人が必ずいる、それがイエスの「恐れることはない」との励ましの言葉です。私たちの人生のさまざまな場面にも、イエスの復活の光が届いているからです。

やがて私たちは、地上の生涯を閉じるときが来ます。しかしその時も、イエスの手に委ねていれば、永遠の御国に目覚める希望があり、平安を得ることができます。

三、信仰による夜明け

イエスに従ってきた人たちは、これまでもイエスを信じてはいました。しかし、イエスの復活は、その信仰が問われるときです。

墓の口が開いたのは、すでにイエスは復活しておられますから、そこからイエスが出てくるためではなく、中が空っぽなのを見せるためです。空っぽの墓を見てどう判断するのか、信仰が問われています。

しばらくして、十一人の弟子たちは、ガリラヤでイエスに会って拝しますが、目の前にイエスが立たれても、まだ疑う者もいたとあります。

私たちがイエスの復活を信じるとき、自分が納得できたら信じようと思っているなら決して信じることはできません。今、私たちは、神から与えられた言葉である聖書を通して神を信じ、救い主イエスを信じて歩み出す中で、生きておられるイエスにお出会いすることができます。そして、イエスと出会ってはじめて、復活が自分にとってどのような意味を持っているのかを悟ることができるようになります。

疑いや迷いはあります。しかし、イエスが、こんな弱い疑いやすい者を赦し救うために十字架に死んでくださったこと、そして、私と共に生きるために復活してくださったことを信じましょう。いつも主の命の光の中に、平安と希望をもって生きることができます。

結論

復活のキリストにお出会いするとき、失望や恐れは喜びに変えられ、平安があふれます。信仰によってキリストを拝しましょう。

研究資料

（中島啓一）

福音書記者たちは、復活の場面を直接には描いていない。最初の証言は、空の墓という証拠を伴った、天的な存在（マタイでは「主の使」）による報告である。もちろん墓が空でなければ、教会がイエスの復活を信仰の中心に据えることは不可能であった。しかし空の墓は逆の立場の論拠にもなり得る（28・13）。それ単独では、信仰のきっかけとはなっても、復活の確固たる証拠にはなり得ない。復活のイエスと会った者の目撃証言が不可欠なのである。その最初の証人となったのが女性たちであった。この聖書の女性観は、その時代の女性観を全く覆すものであったと言える。現代と比べて女性の証言が著しく軽んじられていた時代背景の中で、もし福音書が人の手による創作であったならば、この重要な役割は、決して女性には託されなかったであろう。逆説的であるが、このこともまた、主の復活と、それにまつわる聖書の記述の信頼性を力強く証しするものであると言える。

テキスト

1　安息日が終って　安息日は土曜日の日没をもって終わるが、安全と視界確保のために、**週の初めの日の明け方**　まで待たねばならなかった。**マグダラのマリヤ**　すべての福音書が復活の最初の証人として挙げている。**ほかのマリヤ**　「ヤコブとヨセフ」（27・56、マルコ15・40では「小ヤコブとヨセ」）の母であろう。「クロパの妻マリヤ」（ヨハネ19・25）と同一かも知れない。**墓を見にきた**　亡骸に香料を塗るため（マルコ16・1）。

2　主の使が…石をわきへころがし　女性たちが墓に入るためであって、イエスが墓から出るためではない。**その上にすわった**　死の象徴である墓石の上に座ることは、死に対する勝利をあらわしている。

4　見張りをしていた人たち　祭司長たちの意向を受けて墓の番をしていた（27・62〜66）。**恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった**　大きな地震に加えて、光り輝く御使いの姿は、彼らを恐れさせるに十分であった。体が硬直し、気絶したのであろう。死人の番をしていた彼らが死人のようになり、彼らが守っていた死人が死からよみがえったことは、極めて皮肉なことであった。

5〜6　恐れることはない　直訳すると「（彼らのように）あなたがたまで恐れてはならない」。**十字架におか**

かりになったイエス…もうここにはおられない　死者の中にイエスを見出そうとするならば、彼らのようになる。捜す場所はここではない。**よみがえられたのである**　直訳は「よみがえらされた」（受動態）。動作主は、言うまでもなく神。イエスの復活は父なる神のみわざである。**かねて言われたとおりに**　イエス自身が復活を予告していた（16・21、17・23等）。**イエスが納められていた場所をごらんなさい**　御使いは女性たちに、イエスの体がそこにないことを確認させる。しかし復活への信仰は、空の墓という事実だけから起こるものではない。そのため、後にイエスがご自身を現してくださるのである。

7　弟子たちにこう伝えなさい　女性たちは御使いから、弟子たちへのメッセージを託された。**イエスは死人の中からよみがえられた**　「（神によって）よみがえらされた」（6節と同じ）。これこそが教会の信仰告白の礎石（そせき）である。**あなたがたより先にガリラヤへ行かれる…**　26・32参照。イエスもすぐ後で同じことを語られる（10）。**あなたがたに、これだけ言っておく**　以上の言葉が、神からの権威ある啓示であることを強調している。

8　恐れながらも大喜びで　女性たちはなお恐れつつも「非常な喜び」（2・10と同じ）で満たされた。**急いで墓を立ち去り**　女性たちは、御使いの「急いで行って」（7）という命令に、その通りに応答した。

9　イエスは彼らに出会って…　女性たちへの復活のイエスの顕現（けんげん）は、この福音書のクライマックスの一つである。彼女たちは、復活の主を最初に目撃するという特権にもあずかったのである。**イエスのみ足をいだいて拝した**　イエスが復活されたという事実だけでなく、復活がイエスの言葉と活動とを立証するものであるゆえ、女性たちはイエスを礼拝せずにはいられなかったのである。

10　イエスは彼らに言われた…　御使いと同じメッセージを、イエスご自身も女性たちに託した。**兄弟たち**にイエスはたびたび弟子たちを兄弟と呼ばれた（12・50、25・40、ヨハネ20・17等）。見落としてはならないのは、弟子たちがイエスを見捨てて逃げた後にもかかわらず、彼らを「兄弟たち」と呼び続けておられることである。ここにも神の大いなる愛と赦（ゆる）しが表されている。

参考文献　注解書 D. H. Hagner (Word). D. Hill (New Century Bible). その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

1日　礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ28・1〜10
タイトル　主イエスの復活
暗唱聖句　もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。マタイ28・6
目　標　復活のキリストによって、失望や恐れを喜びに変えて頂く。

導入

イースターおめでとうございます！　そして今日から四月です。全てが新しく始まる、そんな感じですね。

桜の花も咲いたでしょうか？　ところで桜の木って不思議だなあ、スゴイなあって思いませんか？　なぜって、寒い冬の間は葉っぱも全部散っちゃって、なんかまるで死んでしまった枯れ木のように見えるのに、春になるとポップッコーンの様にいっせいに桜の花が咲きますね。まるでイエス様の復活のようです！　命に溢れています。

今日はそんなイエス様の復活の素晴らしさを改めて味わってみましょう！

（土屋開夫）

「死」を象徴する石の蓋

先週はイエス様が十字架に架かられ、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫ばれた場面でした。私たちが父なる神様から捨てられないために、イエス様が身代わりに捨てられて下さったのです。

イエス様は死んで、その霊は陰府（よみ）に下り、遺体は岩を掘ったお墓に葬られました。そして大きくて、重たくて、冷たい石で蓋をされました。

このお墓の石の蓋は、まさに「死」というものを象徴していると思います！　私は実際にイスラエルに行って、「これがその石の蓋です」と言われているものを動かしてみようとしましたが、ビクともしませんでした。

その大きな石のように、「死」というものは人間の力ではどうする事も出来ないものです。どんなに医学の力やお薬が進歩しても、人間を死なないようにすることは出来ません。また、どんなに科学が進歩しても、人間の罪の問題を無くす（解決）する事は出来ません。「死」は大きくて、重たくて、冷たい石のように、私たちの命を閉じ込め、蓋をしてしまうのです。

1日　礼拝メッセージ例

イエス様はどこにいる?

誰(だれ)がこの「死」に勝てるのでしょう? そう、それこそが神の御子のイエス様です!

でも、いつもイエス様の側にいた女性たちも、最初はそのイエス様の力を信じる事が出来ませんでした。それで日曜の朝、彼女たちが向かったのは「お墓」でした。「イエス様は死んでしまわれた、負けてしまわれた…。だからお墓に行こう。せめて死んだお体に香油を塗ろう」そう思ったのです。皆さん、イエス様にお会いするためにはお墓にいけばいいと思いますか? 違いますよね。

女性たちがお墓に行ってみると、あの大きな石の蓋は既にどかされていました。「死」の蓋は取りのけられていたのです! そしてみ使いがこう言いました、「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。」

皆さんに一つ問題です。イエス様はお墓にはおられませんでした。じゃあイエス様はいったいどこにおられるのでしょう?

イエス様が一緒!

女性たちが恐れながらも大喜びで、急いでお墓を立ち去り、弟子たちに知らせに行こうとすると、なんと、よみがえられたイエス様が彼女たちに出会い、「平安あれ」と言われました!

さっきの問題の答えです。よみがえられたイエス様はどこにおられるのか? それは「イエス様を信じる人と共におられる」のです! あなたはイエス様を信じていますか? 罪と死からあなたを救って下さる救い主として。信じているなら、よみがえられたイエス様はあなたと共におられるのです!

四月からの新学年、新しい出発にドキドキ、不安になっている子もいるでしょう。でも、イエス様を信じていれば、いつもイエス様が一緒です。いいですか、罪にも死にも悪魔にも打ち勝った、無敵のイエス様があなたと一緒にいるんですよ! そして「恐れるな」「平安あれ」って言って下さいます。勇気を出して、何でも祈って、信じ続けて進みましょう!

♪勇気を出して♪（PW61）

聖　書　マタイ28・16～20
テーマ　共におられるとの約束

（大頭眞一）

序論

復活されたイエスは、天に昇られる前、弟子たちにお言葉を残していかれた。それは、イエスを信じる私たちにも与えられているお言葉である。

一、信仰への招き

復活のイエスを〈疑う者もいた〉。しかし、イエスは疑う者も含めて〈彼らに近づいてきて〉くださったことに目をとめたい。私たちは信仰の弱さを覚えるとき、主を遠く感じる。けれども、そのときこそ主は最も近づいていてくださるのだ。復活の主を疑った代表格はトマス。主はトマスに近づいて、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」（ヨハネ20・27）とおっしゃってくださったことを思い出そう。

二、宣教のご命令

〈天においても地においても、いっさいの権威を授けられた〉主イエスは〈それゆえに〉宣教を命令される。その権威は神の子としての権威であるだけでなく、十字架と復活を通られたことによって父から与えられた二重の権威である。この権威が及ばないところはどこにもない。私たちの宣教は主の権威の及ばないところで行われるのではない。それがたとえ地の果てであっても、また日本のような偶像の国であっても、主の権威の下にある場所であることを覚えたい。

大宣教命令の内容である〈弟子とし〉、〈父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し〉、〈命じておいたいっさいのことを守るように教えよ〉はいずれも、宣教の目的が一回かぎりの決心ではなく、生涯を通していよいよ神との交わりに進むキリスト者を誕生させることにあることを示す。特に〈父と子と聖霊との名〉というときの名は単数であり、神の三位一体性を示している（新改訳聖書欄外註）。三位一体の神は、愛の交わりのうちに一つの神である。そのありさまは㊢ペリコレーシス、すなわち相互内在・相互浸透と表現されてきた（マ

クグラス「キリスト教神学入門」445頁）。バプテスマによってキリスト者は、ご自身交わりの神である三位の神との交わりへと招かれる。そして、その交わりのうちにキリスト者は宣教に遣わされるのである。このことをヨハネ17章は余すところなく描く。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります」（21節）とあるように。

三、臨在の約束

昇天後も、主イエスは〈いつもあなたがたと共にいる〉と約束された。遍在（どこにでも存在すること）は神の性質である。インマヌエルの神である主が私たちとともにいてくださるのだ。

けれども、ここでの臨在の約束は、信仰者ひとり一人に与えられている約束であると同時に、特に宣教する教会に向けられている約束であることに注意したい。キリストは「そのからだなる教会のかしらである」（コロサイ1・18）。主は教会と一体でいてくださる。教会の喜びや苦しみは、主の喜びや苦しみである。かつて「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」とおっしゃった主は今も教会と喜びや苦しみをともにしていてくださる。現実の教会がいかに問題だらけであるかは言うを待たない。教会の歴史がそれを語っている。何よりも私たち自身がはなはだ不完全で恥じ入るようなお互いである。けれども、そんな教会と共に宣教することを、主はお選びくださった。そして時に教会が誤り、私たちがつまずきとなるときにも、主は私たちと共にとどまってくださって、私たちを励まし、懲らし、悔い改めに導いてくださる。そして、何度でももう一度立ち上がらせてくださるのである。

結論

宣教は主の命令である。主はこの光栄あるわざをご自身の権威をもって可能とし、ご自身が共にいてくださることによって続行させてくださる。インマヌエルの主の招きに応じて、日々主を証しし続ける者であろう。

研究資料

（宮澤清志）

先週の復活祭を越えて、本日まで「復活」という単元である。子どもたちにとっても、新学期を迎え、ある者は新入学・新入園を控えた日でもある。その意味で、この単元の目標にもある「共におられるキリストを覚え、宣教に遣わされる者となる」ことを理解させることは、教会学校教師として、また説教者として、そして何より新学期へと遣わされる子どもたちにとって必要であることを覚えて備えたい。

テキスト

16　十一人の弟子たち　ユダの死を計算に入れた数字（27・5）。**ガリラヤ**　復活の主イエスがガリラヤで弟子たちにお会いになった記事は、この個所とヨハネ21章に述べられている。**イエスが彼らに行くように命じられた山**　具体的な「山」の記述は出てこない。しかし、マタイにおいては、山は神的顕現（けんげん）の象徴として、また日常の世界から離れた啓示の場、ないしは救いの場として描かれている（4・8、5・1、15・29、17・1）。

17　拝した　礼拝した（新改訳）。**疑う者もいた**　この言葉は注目に値する。実は、この「疑う者」が誰（だれ）なのかで、この個所の語り方も変わってくる。例えば16節の「十一人の弟子たちは」を主語として、この場面には復活の主と十一人の弟子がいたとすると、疑ったのは礼拝している十一人の弟子たちということになる。しかし、「ある者は疑った」（新改訳）と取った場合、この場所には十一人の弟子たちの他にも人々がいたことも推測され、パウロが「五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた」（Ⅰコリント15・6）という場面をここに見ることもできる。同時に「疑った」人々とは、この「兄弟たち」ということも可能性を残す。いずれにしても、復活者の顕現によって、信仰に導かれる者となお疑う者とに分極化したという見方である。また、マタイが「疑った」という言葉を用いるに際して、「礼拝」と結びつけている（この個所と14・31）ことから考えると、礼拝しつつも疑ってしまう弱い人間性を指摘しているとも言える。

18　権威　イエスへの権威の与え主は父なる神である。イエスは荒野の試みにおいて、サタンからの試みを決然と拒否し、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」（4・8〜10）と、

ただ神にのみ仕える道を進んで行かれた。ここにおいて、イエスは十字架への道を決然と進んで行かれたのである。しかし、この十字架と、それに続く復活を通ってこそ、天上・天下一切の権威がその手に託されたのである。

19〜20　すべての国民　イエスは、この「神の子」としての権威により、大宣教命令を出されるのである。その命令は「行って、すべての国民を弟子とする」ことである。この個所で、とあるが、特筆すべきはマタイがイエスの復活において世界的伝道の視点を持ったと言うことである。復活前のイエスの時代には、福音はイスラエルに限定して語られていた（参考　10・5〜6、15・24）が、イスラエルが福音を拒否した結果、福音は異邦人に対しても語られる時代に突入した。イエスの復活によって新しい時代の幕が開いたと言える。

また、その弟子たちに命じられることは、「父と子と聖霊との名によって、人々にバプテスマを施すこと」であり、また「命じられたいっさいのことを守るように教えること」であった。前者について言えば、三位一体の神との結合という意味合いがそこにはある。**名によって**とは、名の中へ、すなわち父、子、聖霊の神ご自身との生きた交わりに入ることを表わす。また、後者の**教え（る）**　とは、教え続けるという継続を表す言葉であり、またその内容は、**命じておいたいっさいのこと**　とあるように、山上の垂訓を初めとするこの福音書に記されているイエスの教えのすべてであると考えられる。**見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである**　マタイによる福音書の特徴は、イエスを常に信仰者と共にいるお方（インマヌエル）として描いているということである（1・23、18・20）。マタイによる福音書のイエスは、徹頭徹尾（てっとうてつび）「インマヌエル」で貫かれているといってもよい。洗礼を受けて、主イエスの教えの一切を守ることができるのは、主イエスが信仰者と共にいてくださるからである。

最後に、この個所に「すべての」「いっさいの」「いつも」という句が繰り返されていることも見逃すことができない。福音はすべての人間に、聖書におけるすべての内容を、すべての時に、主の弟子たちによって、伝えられなければならないのである。

参考図書　デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換上』（東京ミッション研究所）、他

8日　礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ28・16〜20
タイトル　一緒にいてくださるイエス様
暗唱聖句　見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。（マタイ28・20）
目　標　共におられる主を覚え、宣教に遣わされる者となる。

導入

（飯田勝彦）

もう新しい学年がスタートした人や、これからスタートとする人もいるでしょう。クラス替えなどで新しい友だちができると良いですね。もし、みんなの友だちが「これからずっとずっと、友だちでいようね」と言ってくれたら嬉しいでしょう。では、イエス様から同じ言葉を言われたらどうでしょう？　イエス様は心からみんなに「どんな時でも、あなたから離れずにいつも一緒にいるよ」と約束してくださいます。

イエス様の復活を信じる

イエス様は、どうして「いつもでも一緒にいる」と言ってくださるのでしょうか？　それは、みんなを心から愛していてくださるからです。みんなも大好きな友だちといつまでも一緒にいたい、と思うでしょう。イエス様も同じです。イエス様は、罪で苦しんでいる私たちを自由にするために十字架で死なれました。しかし、イースター礼拝で聞いたように、イエス様は死んで終わったのではなく、3日目に死の力に打ち勝って復活されました。そして、弟子たちの前に自分が復活したことを現してくださいました。でも、弟子たちの中には、復活を信じる人と疑う人がいました。みんなはイエス様の復活を心から信じていますか？　「ビミョ〜（微妙）」って言う人がいますか。イエス様の復活を信じるなら、私たちの心に力と大きな喜びがわき出てきます。イエス様は、皆さんがイエス様の復活を信じる事を願っておられます。

イエス様を伝える

復活されたイエス様が、弟子たちに「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいことを守るように教えよ」と言われました。これは、イエス様の「大宣教命令」と言われるものです。イエス様は、このすばらしい福音をすべての人に

伝えなさいと弟子たちに命令されたのです。私たちを愛し、力と恵みをいっぱい与えてくださるイエス様を、自分だけのものにしておいても良いでしょうか。

みんなは、嬉しいことや楽しいことがあったら友だちやお父さんお母さん、兄弟姉妹に黙っていられなくて思わず言ってしまうと思います。そのように、復活されたイエス様を多くの人たちに伝えて行きましょう。

イエス様が弟子たちに言われたこの「大宣教命令」は、今の私たちにも言われていることです。そして、イエス様はみんながイエス様の事を一人でも多く人たちに伝えて行くことを期待して用いてくださいます。

イエス様は共におられる

弟子たちにはイエス様を伝えに行くために、何が助けになったでしょうか。それは、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」と言うイエス様の約束でした。イエス様は弟子たちだけに宣教に行かせて「あとは頼んだぞ」と言われませんでした。イエス様は、弟子たちと共に行ってくださるのです。それも、世の終わりまでいつも共にいてくださるのです。

イエス様が十字架で死なれた時、弟子たちはイエス様を見捨てて逃げてしまいましたし、彼らは心の中で「もうすべてが終わりだ」と思ったに違いありません。でも、イエス様は、裏切った弟子たちを見捨てないで彼らの前に現れたのです。そして「世の終わりまで共にいる」と約束されました。

イエス様が弟子たちに言われたこの言葉を今朝、同じようにみんなにも言われます。たとえイエス様のことを思う時も思わない時でも、どんな場所でもイエス様は、いつも共にいてくださいます。そして私たちをイエス様を伝える宣教のために用いてくださいます。イエス様の側で、イエス様のお役に立てるなんて素晴らしいですね。

まとめ

イエス様が死より復活し、世の終わりまでいつも共にいてくださると信じる時、みんなの心は守られ力が与えられます。事実、み言葉で約束して励まして下さいます。私たちは喜んでイエス様を伝えることが出来ます。今も共におられるイエス様を信じて、家族や友だちの所にイエス様と共に遣わされて行きましょう。

♪主はよろこびです♪（ホ76）

聖　書　ルカ3・15〜22
テーマ　イエスの受洗

（小泉　創）

序論

洗礼式は喜びの日です。罪と死の内にとらえられていた者が救い出されて、父・御子・御霊の名によるバプテスマを受け、神のご支配の中で歩んで行く者とされるのです。

ところが罪なき神の子である主イエスも、公生涯のはじめに私たちと同じように洗礼をお受けになられたのです。

一、救い主は誰（だれ）か

人々がずっと待ち望んでいたのは、預言者の権威に満ちた存在でした。多くの人は、バプテスマのヨハネが悔い改めを迫る姿に、不正を正し社会をつくり変える神のみわざを期待したのでしょう。彼の姿は、自分たちが求める救い主にふさわしいと感じていました。

しかし、ヨハネは自分は救い主ではない、と知っていました。①自分はその方の偉大さの前には仕えることもできないほど、いやしい者にすぎない、②その方は聖霊と火によるバプテスマを与え、③麦ともみがらを吹き分けるように裁きを行われる、と。

ヨハネは救い主の道備えをするために来たのです。彼はヘロデの罪を告発し、とらわれの身となりましたが、それはキリストのたどられる苦難の道を先取りしたかのようでもあります。

ヨハネにはるかに勝るイエスは、ヨハネほど注目されることなく、人々の只中に立たれ、救い主として公生涯を始めようとしておられます。人々がどのように判断しようと、イエスこそが神が送られた唯一の救い主なのです。

二、イエスが受けられたバプテスマ

ヨハネが民衆に授けていたのは、罪のゆるしを得させるバプテスマでした（ルカ3・3）。イエスは罪の悔い改めを必要としないきよい方です。ですから本来は、バプテスマを受ける必要はなかったのです。それなのに、イエスは民衆と同じように、バプテスマを受けられました。イエスは神であるにも関わらず、罪人と同じところにま

で下りてきてくださったということです。

イエスがバプテスマを大切になさったので、教会も二千年間バプテスマを重んじてきました。主イエスが受けられたのと同じように、私たちもバプテスマにあずからせていただきます。それは私たちがキリストの死とよみがえりにあずかり、キリストと一つにされるためなのです。

三、神の愛する子

バプテスマを受け祈っておられたイエスに、不思議なしるしが与えられました。天が開けて聖霊がはとのような姿をとってイエスの上に下り、天からの声がしたのです。それはイエスに対する父なる神の宣言でした。

〈あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である〉。これは王の即位を歌った詩篇2・7を思い起こさせます。神は、神の子であり、王であるイエスを救い主としてお送りくださったのです。

これほどまでに尊い方が、私たちのすべてを引き受けてくださり、罪と死から救うために、いのちをかけてくださったのです。イエスの姿を通して、私たちは神を知り、神の愛の大きさを知ることができます。

「神を見た者はまただひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」（ヨハネ1・18）。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3・16）。

結論

イエスは神であられたのに、私たちと同じ人の姿をとってくださった救い主です。どのように力ある人物でも仕える資格をもたないほどに貴いお方です。そうであるにも関わらず、イエスは私たちを愛し、共に歩むことを喜んでくださいます。イエスが父なる神にどこまでも従い通され、一つであられたように、私たちもイエスを信じて一つとされ、どこまでも従ってまいりましょう。

研究資料

（辻林和己）

ルカ3・1〜20は、バプテスマのヨハネ（洗礼者ヨハネ）の宣教の様子を告げる。7〜14節で、ヨハネは群衆、取税人、ローマの兵卒たちに、悔い改め、愛と正義、誠実と知足を説く。21〜22節は、主イエスの受洗のときに起こった出来事を語る。

テキスト

16 わたしには、そのくつのひもを解く値うちもない 当時、主人のくつ（履き物）のひもを解くことは奴隷の役目だった。「わたしよりも力のあるかた」である救い主に対して自分はしもべとして仕える値打ちもない。それほどこの地に「おいでになる」救い主は偉大なお方であることを証しする言葉。**聖霊と火とによって** ヨハネが施していた洗礼は人々の悔い改めのための「水のバプテスマ」であった。しかし、救い主はもっと力のある「聖霊と火のバプテスマ」を授けられる。「聖霊のバステスマ」が人々に与えられるようになるのはペンテコステの出来事（使徒2・1〜4）以降。「火」は聖霊が人をきよめるみわざを表しているという説がある。

17 打ち場の麦をふるい分け 農業の脱穀の麦のふるい分けは、神の裁きの表象として用いられている。殻を「消えない火で焼く」は神の決定的刑罰を表す。ルカ3・9の警告がここでより強く示されている。

18 教を説いた 原文では〔ギ〕ユーアンゲリゾマイ（「良い音ずれ（福音）を告げる」という意味の動詞）が用いられている。ヨハネの働きは、主イエスの福音宣教への備えとなった。

19 ヘロデ ヘロデ大王（1・5）の息子ヘロデ・アンティパス（3・1）。彼がガリラヤとペレアとの領主であったのは、BC4年〜AD34年。**妻ヘロデヤのこと** ヘロデは自分の妻（アラビア王アレタ四世の娘）と離婚し、異母兄弟ヘロデ・ピリポの妻を奪って自分の妻にした（マルコ6章、レビ18・16参照）。この不法な結婚に関してヨハネはヘロデを非難したが、ルカ福音書だけはそれだけでなく「あらゆる悪事について」責めた、と告げる。

20 彼を獄に閉じ込めて バプテスマのヨハネの投獄と死に至る経緯は、マルコ6・14〜29で語られている。ル

カ福音書では、これ以降、ヨハネは登場しない。「旧約聖書最後の預言者」と呼ばれるヨハネは、その短い活動期間を終える（ルカ16・16参照）。

21 イエスもバプテスマを受けて 民衆と主イエスの受洗は、時系列では、19～20節のヨハネの投獄より前である。主イエスがヨハネからバプテスマを受けられた理由は諸説ある。主イエスがヨハネに受洗を志願された「今は」（マタイ3・15）、主にとって新しい出発の時。人の目から隠れた生活から、メシヤ（救い主）としての公生涯への転換であったから。また主イエスがヨハネから受洗することによって、ヨハネの働きが神から出たものであることが明らかにされるために。以上のような理由が考えられる。しかし、最も重要なことは、主イエスはやがて十字架上で人々の罪を負われるお方であるがゆえに、公生涯の初めにバプテスマを受け、罪人の立場に立って下さったことである（イザヤ53・12、Ⅱコリント5・21参照）。**祈っておられると** ルカは他の福音記者が何も記していない主イエスの祈りの生活を六回記しているが、これはその初回である。

22 聖霊がはとのような姿をとってイエスの上に下り… 旧約聖書には、預言者や王の任職のときに神の霊が下ったり、油を注がれたりする個所がある。ここで聖霊が下ったことは主イエスがメシヤとして任職されたことのしるしであろう。鳩はイスラエルの象徴で、主イエスが新しい神の民を代表することを示しているという解釈、鳩を柔和さの象徴とする解釈等があるが、どれも決定的ではない。**そして天から声がした、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。** 天からの声は、主イエスが神の子であることを明らかにする宣言である。父なる神の、御子イエスに対する愛が強調されている。「聖霊」と合わせて、ここに三位一体の神が啓示されている。宣言の表現は王であり神の子であるメシヤを語る詩篇2・7を想起させる。主イエスは王であり、神の子であられたのに、ヨハネからバプテスマを受け、罪人の立場に立って公生涯を歩み始められたのである。

参考図書 ラルフ・アール「ルカの福音書」『ウェスレアン聖書注解』（新教出版社）、熊谷徹「ルカの福音書」『新実用聖書注解』（いのちのことば社）他

15日 礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ3・15〜22
タイトル　イエスの受洗
暗唱聖句　あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。　ルカ3・22
目　標　神が遣わされた御子キリストを信じ、従う者となる。

導入

（和田牧子）

皆さんは、洗礼式に出席したことがありますか。イエス様を救い主と信じた人がその信仰の証しとして受ける、とてもうれしい式のことです。牧師先生から、水を頭に三回かけていただく時もあります。海や川にザブーンとつかるやり方もあります。イエス様によって新しく生まれ変わったことを、神様と人の前で告白するのです。

バプテスマのヨハネ

バプテスマのヨハネと呼ばれた人がいました。バプテスマとは、洗礼という意味です。聞いたことはありますか？　イエス様の弟子のヨハネさんとは別の人ですよ。

ヨハネはヨルダン川のほとりの、全ての町に行って、人々に力強く言いました。

「まむしの子らよ！　神様の怒りから逃げられるとだれが教えたのか！　罪を悔い改めて、神様の子としてふさわしく生きなさい。」

その言葉には力があり、多くの人々が、自分の罪を悔い改め、新しい者になりたいと決心しました。そして兵士や税の取り立て人を含めた群集が、次々と列に並び、ヨハネから洗礼を受けました。

さらに力のある方

バプテスマのヨハネによって、ヨルダン川に身体を沈め、洗礼を受けた人々は、もしかしたらこのヨハネこそが長い間待ち望んでいた救い主なのでは？と考えていました。ヨハネはどう言ったでしょうか。「そう、わたしこそが、おまえたちを救うキリストだ！」と言ったでしょうか。いいえ、違いました。

「わたしは水でおまえたちにバプテスマを授けるが、わたしよりも力のあるかたが、おいでになる。」

バプテスマのヨハネより力のある方、それはいったいだれのことでしょう。

「わたしには、そのくつのひもを解く値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマ

をお授けになるであろう。」

ドロドロに汚れた、他の人のくつのひもを解くって嫌ですよね。当時それは、しもべの仕事でした。でも、ヨハネにとって、そんなくつのひもを解くことさえもったいない人、自分とは比べものにならない素晴らしい方が来られるのだと宣言したのです。

その、さらに力のある方こそが…そう、イエス様です。イエス様こそ、世の罪を取り除く救い主、キリスト様なのだと、ヨハネは伝えたのです。

イエスの洗礼

さて、ある日のことです。イエス様はバプテスマのヨハネのもとにやってきました。そして、ヨハネに頼んで、ヨルダン川に身を沈め、バプテスマを受けられたのです。ヨハネはびっくりしましたが、イエス様は「今は受けさせてもらいたい」と言われたのです。そして、イエス様が水から上がられると、神様にお祈りをされました。すると、天が開いて、聖霊がはとのような姿をとってイエス様の上に下り、天から声がしました。

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

イエス様こそ、神様の愛されている御子、神様のお心にかなう方であることがわかります。

そんなイエス様が、あえてヨハネから水のバプテスマを受けられたのはなぜでしょう。それは、罪でいっぱいの私たち人間と全く同じ者として生きられるためでした。

イエス様は洗礼を受けたあと、町々村々を巡り歩き、神様のみ言葉を多くの人々に伝えていかれました。そして何の罪も持たなかったにもかかわらず、十字架にかかって、罪びとの身代わりに死んでくださいました。

まとめ

皆さんの心には、悔い改めなければならない罪はありませんか。神様ごめんなさいとおわびして、イエス様を信じるなら、私たちも神様の子どもです。悔い改めにふさわしい人生を、イエス様によって送ることができます。そしてまだ洗礼を受けていないお友だちは、お祈りをして、一番良いときに洗礼を受けることができたなら、素晴らしいですね。

♪わたしは主のこどもです♪（イン51、ホ88）

聖　書　ルカ4・1〜13
テーマ　荒野の誘惑

（小泉　創）

序論

主イエスは公生涯を始めるにあたり、私たちと同じように洗礼をお受けになり、荒野にて悪魔からの誘惑を受けられました。「聖霊に満ち」た主イエスが、「御霊にひきまわされて」誘惑にあわれたのです。ましてや私たちの信仰生涯が誘惑と無縁のはずはありません。主がどのように誘惑に打ち勝たれたかを学びましょう。

一、第一の誘惑

四十日にわたる断食によって空腹になられた主に、悪魔の最初の誘惑がおそいかかります。悪魔は「あなたが神の子であるなら」と、近づいてきます。3章の洗礼の場面で神が宣言なさった「これは私の愛する子」という言葉を逆手にとっての誘惑です。悪魔はキリストがどのようなこともなし得ることを知っていましたので、〈この石に、パンになれと命じてごらんなさい〉と言ったのです。石をパンに変える奇蹟は、多くの人にとって〈よきしらせ〉にみえるでしょう。グローバルな格差社会に住む私たちは、飢餓（きが）の問題、暴力の問題、金銭的搾取、性的搾取の問題など、多くの問題に取り囲まれています。目の前の課題に具体的な解決をもたらすことができたら、神の素晴らしさをあらわせるのにと歯がゆく思ったり、それができない教会があまりにも無力であるように思うことがあるかもしれません。そのようなとき、私たちにも目の前にパンがないことが問題なのだ、とささやきかけられているのではないでしょうか。

しかしイエスは悪魔の言葉を拒み、旧約聖書・申命記8・3の言葉を引用しました。〈人はパンだけで生きるものではない〉。人々の必要を決して軽んじたりはしませんが、本当の意味で人を生かしていのちを与えるのは、神の言葉であることを見失ってはなりません。

二、第二の誘惑

悪魔はイエスに、自分にひざまずくならば、世界中のすべての権威と栄華を与えると告げます。神の子に向かって、自分を拝めというなど、正気の沙汰ではありません。悪魔崇拝はせずとも、知らず知らずのうちに繁栄を

求める「ご利益信仰」に陥ってしまうならば、その行きつく先は偶像礼拝です。この誘惑に陥って、どれほど多くの人々が信仰の道を踏み外してきたことでしょう。全ての物を得るように見えて、それは全ての物を失う虚しい道なのです。イエスは再び申命記を引用して、この誘惑を退けられました。〈主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ〉（申命記6・13）。神だけを礼拝し仕えることに徹し、偽りの権威、栄華に心を奪われないことです。

三、第三の誘惑

最後に、悪魔はイエスをエルサレムの宮の頂上に連れて行きました。そして、〈神の子であるなら〉ここから下へ飛び降りてみよ、神は必ずあなたを守ってくださるから、と詩篇91篇のみ言葉を引用して誘惑したのです。悪魔もみ言葉に通じています。本来この詩篇は、主を避け所とする者が、日々歩く道で守られるという信頼を歌ったものです。あえて危険な中に飛び込んで、神に対して無謀な試みをすることを勧めてはいません。神の名を用いて、聖書をねじ曲げて不健全なところへと導くのは悪魔の常套手段です。創世記のエデンの園のときからずっと、悪魔は巧妙に嘘を織り込みながら、人を神から引き離そうとしてきました。

主イエスはここでも申命記を引用します。〈主なるあなたの神を試みてはならない〉（申命記6・16）。私たちの神は試みる必要などない、信頼して間違いのないお方です。

悪魔の誘惑は十字架の場面でもなされました。神のキリストであり、王であるなら、十字架からおりてみよ、自分を救ってみよ、とあざ笑ったのです。神の力をあらわせと言いながら、神を信頼すること、従うことをやめさせようとする誘惑の声です。主イエスは十字架からおりることをなさらず、苦難の道を歩み切って勝利してくださいました。主は私たちにも、真実な神に信頼し従い続けるようにと、招いておられます。

結論

イエスは神のみ言葉によって、悪魔の誘惑に勝たれました。私たちもみ言葉を健全に理解し、心にたくわえましょう。そして嘘が込められた悪魔の誘惑に勝利しましょう。

研究資料

（辻林和己）

ヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた後、主イエスは宣教を始められる（3・23）。具体的な宣教開始は4・14からである。その前に、主イエスは荒野で悪魔の誘惑にあわれる。

テキスト

1　イエスは聖霊に満ちて　「荒野の試み」の並行個所はマタイ4・1〜11、マルコ1・12〜13であるが、ルカだけが主イエスは「聖霊に満ちて」おられたと告げる。

2　四十日のあいだ　「四十日」は旧約の出エジプト後の荒野の旅を想起させる。マナに満腹していたイスラエルの民は荒野で反逆し、苦悩の四十日つまり四十年を罰として科せられた（民数記14・34）。しかし、主イエスは何も食べずに荒野で神に従い通される。**御霊にひきまわされて**（「御霊に導かれて」新改訳）　この荒野の試みが神の計画と御霊の守りの中で起こされたことを示す。そして、神の御子イエスが神への全き従順と信頼の道を歩まれたことをも示している。

3　もしあなたが神の子であるなら…　悪魔は主イエスが神の子であることを否定しなかった。神の子としての力を用い、石をパンに変えるようにと誘った。奇蹟によって自らの飢えを解決し、飢えている人々を助けるならメシヤとして使命を容易に果たせるではないかと勧める。

4　人はパンだけで生きるものではない　主イエスは、申命記8・3の言葉をもって悪魔の試みを退けられた。申命記はこの後、「人は主の口から出るすべてのことばによって生きる」と語る。パン（食物）も大切であるが、パンを与えて下さる神を知り、神の言葉を魂の糧とし、それによって養われることは何よりも重要である。

6　それらはわたしに任せられていて　主イエスは悪魔の主張をここでは拒否しておられない。ヨハネ福音書の中で主イエスは中で三回、主イエスは悪魔（サタン）について「この世の君」と言っておられる（ヨハネ12・31、14・30、16・11）。**もしあなたがわたしの前にひざまずくなら…**　悪魔はわたしに服するなら、すべての富と権力を手に入れ、世界を支配することが出来ると誘う。

7　主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ　こ

のときも、主イエスは申命記のみ言葉（6・13）を引用された。礼拝と奉仕は神にのみささげられるべきものである。

10〜11 神はあなたのために…守らせるであろう あなたの足が…手でささえるであろう 神への深い信頼を詠う詩篇91・11〜12を悪魔は引用し、主イエスを罪に誘う。宮の頂上から飛び降りてみろ、そうすれば神は御使いを送ってあなたを支えるであろう、そしてその奇蹟を見て、人々はあなたをメシヤと崇めるであろう、と。

12 主なるあなたの神を試みてはならない 今回も主イエスは申命記を引用して答えられた。そして悪魔による聖句の引用が誤りであることを明らかにされた。この申命記6・16は飲み水がなかったイスラエルの民がモーセに不満を言ったこと（出エジ17・1〜7）に対して語られたことである。この個所は奇蹟を求める目的で、神を試みることはよくないと語っている。主イエスは、ご自分のためには奇蹟を起こす力を用いられなかった。いつも人を助け、苦しみから救い出すためにそれを用いられた。そして主イエスはみ言葉によって悪魔の誘惑を退け、神の主権に委ねることを示された。

13 悪魔はあらゆる試みをしつくして 荒野の誘惑は今回の個所に記されている三回だけでなく、長く続いたことが示されている。悪魔はあらゆる種類の試みを主イエスに対して成したが主はそれらに打ち勝たれた。エデンの園ですべてを与えられていたにも関わらず、アダムは悪魔の誘惑に負けて堕落してしまった。しかし、主イエスは何もない荒野で、ただ神に従い、み言葉と御霊により頼んで勝利された。**一時イエスを離れた** 荒野での悪魔の誘惑は、主イエスに富や権力や奇蹟という「目に見えるしるし」を与え、十字架への道を回避させようとする試みであった。この後も、悪魔は、主イエスを十字架へ行かせないように、十字架から降りるようにと執拗に働きかけてくる（マタイ16・22、27・39〜43、マルコ15・29〜32等）。

しかし、この荒野の誘惑、悪魔の試みに打ち勝たれたお方として、主はこれから公の働きを開始される。

参考図書 榊原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解』（いのちのことば社）、熊谷徹「ルカの福音書」『新実用聖書注解』（いのちのことば社）他

22日 礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ４・１〜13
タイトル　荒野の誘惑
暗唱聖句　人はパンだけで生きるものではない。
ルカ４・４
目　標　御言葉に立って、悪魔の誘惑を退けられたキリストにならう者となる。

導入

（和田牧子）

皆さんは悪魔っていると思いますか。私たちを悪の道に引っ張って行く、恐ろしい存在です。イメージ的にはバイキンまん？　いえいえ、もっと怖くて強い、誘惑の力をもっていますよ。なんと、神様の御子イエス様でさえ、悪魔に誘惑されたのです。イエス様は悪魔の誘惑に勝たれたでしょうか。負けてしまわれたでしょうか？

第一の誘惑

イエス様は、聖霊にみたされ、ヨルダン川を後にされると、御霊に導かれてユダヤの荒野に向かわれました。そして四十日間、悪魔の誘惑にあわれたのです。その間、何も食べなかったので、イエス様はお腹がペコペコになってしまいました。

皆さんは四十日もごはんを食べなかったらどうなりますか？　一日でも食べなければ、フラフラになってしまいますね。そんなイエス様に、悪魔がやってきて言いました。「もしあなたが神の子であるなら、ここに転がっている石に、パンになれと命令してごらんなさい。」

悪魔はイエス様が何でもお出来になることを知っていたので、そう言って誘惑したのです。しかし、イエス様は「『人はパンだけで生きるものではない』と聖書に書いてある！」と言われて、悪魔の言うとおりにはされませんでした。

第二の誘惑

次に悪魔は、イエス様を高い所に連れて行き、あっというまに世界の全ての国々を見せて言いました。「これらの国々のきらびやかな栄光をあなたにあげましょう。それらは、みんなわたしにまかされて、好きにしていいのです。わたしの前にひざまずいて礼拝するなら、これらの全てをあなたにあげます。」

それに対してイエス様は「『主なるあなたの神を礼拝し、ただ神にのみ仕えよ』と聖書に書いてある！」とお答えになり、またまた悪魔の誘惑に負けられませんでし

た。

第三の誘惑

さあ、次は三番目の誘惑です。悪魔もなかなかあきらめませんね。悪魔はイエス様をエルサレムに連れて行き、お宮のてっぺんに立たせました。とても高くて、落ちたら命はないような高さです。「もしあなたが神の子であるなら、ここから下へ飛びおりてごらんなさい。聖書には『神様は御使いを送って、あなたを支えさせ、あなたが岩の上に落ちて砕かれることのないように守られる。』と、書いてありますよ。」と言いました。

イエス様はどうされたでしょうか。何でもお出来になる奇跡の力を見せるために、高いお宮から飛びおりられたでしょうか。いえいえ、イエス様は悪魔に「『主なるあなたの神を試みてはならない』と聖書に書いてある。サタン（悪魔）よ退け！」とおっしゃいました。さすがに悪魔も降参です。悪魔はイエス様から離れていきました。

私たちへの誘惑

私たちが生きているとき、悪魔が目に見えるようにやってきて、ああしなさい、こうしなさいと命令することは無いかもしれません。でも、目に見えないかたちで私たちの心にやってきて、上手に誘惑するときがあるのです。「お腹がすいているんでしょう。誰も見てないよ。お店からパンを一つ取ってきなさい。」「となりの子の答案をこっそり見てしまえ。いい点をとって、おかあさんにほめられるよ。」などなど、悪いことを正しいことのようにそそのかしたりします。

また、神様よりも、お金持ちや有名になること、はなばなしいゴージャスな生活が大事であるかのように思わせたりします。そして、聖書の神様だけを信じて、礼拝していく人生なんてうそだ！と思わせたりするのです。

まとめ

私たちはどうしたら、悪魔の誘惑に負けない、勝利の生活を送ることができるでしょうか。イエス様のように、み言葉に立って生きることです。み言葉をとおして、神様の喜ばれることが何かを正しく知ることです。

「神様、私たちは弱いものですが、イエス様のように、み言葉によって勝利の生活ができますように、力を与えて下さい。」

♪フリー♪（イン40、ＰＷ56）

聖　書　ルカ5・1〜11
テーマ　キリストの弟子として

（金井信生）

序論

ガリラヤ湖の漁師だったシモン・ペテロがイエスの招きに応えて弟子となりました。その第一歩はみ言葉に聞き従うことと、自分が罪深い者であることを認めることから始まりました。

一、沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい

イエスが湖畔に立っておられたとき、漁師たちは夜通しの漁を終えたところで、網を洗い、繕っていました。また舟を沖に出すには労力が入りますし、網を降ろせば、魚が取れても取れなくても、また網を洗い直し、繕い直す手間がかかります。

初め、イエスが少しこぎ出すように頼んだときは、先にシモンのしゅうとめの病をいやしていただいた感謝もあり、気安く引き受けたことでしょう。群衆に声が届くように手を止めて舟を出すことで、イエスの働きを手伝う、お役に立てたと思ったかもしれません。

しかし、続く〈沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい〉との言葉はどうでしょうか。舟を出して漁をするのは、漁師の領分です。イエスに対する感謝と信頼があっても、自分の世界に入り込まれることを受け入れるのか、受け入れないのか、そこがイエスの弟子となる分岐点でした。

シモンは〈しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましょう〉と答えました。舟に乗り、間近で聞いていたシモンの心に、イエスの言葉は届いていました。昔、神がこう命じられたから従いなさいではなく、今、生きて目の前におられるお方との交わりの中で、従う決心が与えられました。

そして従った結果が、網が破れそうになり、船が沈みそうになるほどの大漁でした。シモンは、イエスの言葉に従った時に得られる祝福があることを学び、証しする者へと導かれていきました。

二、わたしは罪深い者です

シモン・ペテロは、舟を下りると主イエスの足もとにひれ伏し、〈わたしは罪深い者です〉と告白しました。

ペテロが自分を「罪深い者」と言ったのは、舟を出してはみたものの、漁について素人であるイエスの言葉を

まともに信じていなかったこともあるでしょう。

また、「異邦人のガリラヤ」と見下され、パリサイ派や律法学者たちからは、清くない者とされている自覚もありました。

何よりも、ただならぬ力を持っているイエスの存在に打たれ、〈先生〉ではなく、〈主よ〉と、神の前に出る恐れを感じました。

もともと、漁をできることも、得られた収穫も、すべて神の恵みであるのに、いつしか自分の力でやっているかのように思ってしまいやすい私たちです。そして、神を信じる者といいながら、神の立ち入ることを拒んでいた自分の領域を持っていることは、深い罪です。イエスを預言者や教師としてではなく、全世界を治めておられる主と認めていなかったことが罪であることをペテロは自覚し、悔い改めました。

三、人間をとる漁師になるのだ

イエスはペテロに〈恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ〉と語られました。人間を生け捕りにする者、すなわち、迷いの中、罪の中にいる人を主のもとに導き、生き生きとした人生に歩ませる働き人になるようにとの言葉です。

ペテロは、〈いっさいを捨ててイエスに従〉いました。それはまず、ペテロ自身がイエスにとらえられたからです。夜通し働いて一匹も魚がとれなかったのに、イエスが共に乗り込まれ、その言葉に従ったときに、大きな祝福を得ました。

お金のためとか自分の満足のためだけに生きるとき、私たちは自分も、まわりの人も失ってしまいます。これまで何のために生きているのかわからず、これからどうやって生きていくことができるのか不安をおぼえることの多い私たちですが、イエスに従い、共に歩むなら、どんな立場であっても〈人間をとる漁師〉になることができます。その収穫は共に主を喜ぶ仲間が増えていくことであり、永遠に残るものです。

結論

主の救いがなければ、空しい日々を送ることしかできず、神の御心にそむくことの多い者であることを認め、そんなものを招いて尊い働きに用いてくださるキリストに従いましょう。

研究資料

（中島啓一）

テキスト

1　群衆が神の言を聞こうとして押し寄せてきた　「神の言」は前章の「神の国の福音」（4・43）。それを聞くために来るのは良い態度だが、それだけでは不十分（8・4～15参照）。シモンのような主体的応答が不可欠であった。**ゲネサレ湖**　ガリラヤ湖（マルコ1・16）。

2　二そうの小舟　大きな網で効率よく漁をするために、普通2そう以上の舟でチームを組んで働いた。**舟からおりて網を洗っていた**　漁を終えた後は、たとえ不漁でも、次回に備えて網を洗い、繕っておく必要があった。

3　シモン　彼は先に、そのしゅうとめの高熱をイエスに癒（いや）してもらっている（4・38～39）。**イエスはそれに乗り込み…お教えになった**　押し寄せてきた群衆が多く、適度に距離をとる必要があったのであろう。さらにその状況は、音響的に円形劇場のような効果をもたらし、イエスの声をずっと聞きとりやすくしたと考えられる。日頃はシモンたちが魚をとる舟の上で、イエスはこのとき「人間をとる」（10）働きをされたのである。

4　沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい　前節では「岸から少しこぎ出させ」とあったのに対し、ここは「沖へこぎ出し」とあるのを、ユダヤ人宣教と異邦人宣教の対比としてとらえる解釈もある。

5　先生　一般的な教師（ギ）ディダスカロス）ではなく、ここでは（ギ）エピスタテース（主人、上に立つ者の意）が用いられている。ルカは前者を客観的な「先生」の意味で用いるのに対し、後者は、相手の権威に対する主観的・個人的な感服が内包されている表現である。**夜通し働きましたが、何も取れませんでした**　魚の捕れやすい夜間でも不漁であったのだから、日の昇った今ではなおさら捕れるはずがないという気持ちが言外に表れている。**お言葉ですから**　イエスの言葉に内在する権威を指し示す表現。イエスの言葉を間近で聞いたシモンは、半信半疑の中にも、しゅうとめにも癒（いや）しをもたらしたその言葉に得も言われぬ権威を感じ取っていたのだろう。**網をおろしてみましょう**　当時のユダヤ社会では、教師がその専門分野について命じるときには従うべきという風潮があった。裏を返せば、そうでないことについては従う必要は無かったのである。シモン・ペテロから見て、イエ

スは漁の素人であった。それゆえ、この応答は、自発的な側面も含まれる、ある種の服従と見ることができよう。

6〜7 おびただしい魚の群れ…網が破れそうに…もう一そうの舟…両方の舟いっぱい…舟が沈みそうになった 奇跡の素晴らしさが複合的な表現を用いて証言されている。このようなイエスによる増殖の奇跡は、旧約に前例を見出し得る（出エジプト8・6、列王下4・1〜7等）。

8 主よ ㊒キュリオスは一般的な「主人」をも意味し得る語であるが、ここでは1・43や2・11のような「いと高き主」を意味するであろう。**わたしから離れてください。わたしは罪深い者です** 半信半疑で従ったことに対する後ろめたさもあったであろうが、それだけではない。すなわち、イエスの神的な権威に圧倒されたシモンは、自分の罪深さを認めるしかなかったのであろう。神の臨在に触れたとき、あのイザヤでさえ絶望の叫びを上げざるを得なかった（イザヤ6・5）。イザヤの場合と同様、ここもまたシモンにとっての召命の場面となった。

10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネ この3人は8・51、9・28でも揃って登場する。**今からあなたは人間をとる漁師になるのだ** その言葉によって万物を支配されるイエスが宣言するならば、それを成し遂げるためのすべての力も添えて与えられ、実現する。なおここでの漁師は㊒ゾーグローで、直訳すると「生きたまま捕らえる者」の意。エレミヤ16・16を想起させる表現だが、そこで描かれる情景が差し迫ったさばきであるのに対し、ここでは主題がそのさばきからの救いへと移り変わっている。神のみ心は、さばきではなく、救いにあるのであり、それゆえ、**恐れることはない** とシモンに語られたのである。イエスが命じるならば、恐れさえも消え去る。モーセやダビデがその使命を果たす上で、かつて羊飼いであった経験が役立ったのと同様に、ペテロが新しい使命を遂行していく上で、主は漁師としての彼の経験をも用いてくださるであろう。

11 いっさいを捨ててイエスに従った 当時の漁師の収入は一般の平均以上だったと言われている。それを含めたいっさいを捨てるという態度には、新しい出発に向けての根本的な服従の意志が表されていると言える。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Noland (Word), 榊原康夫（新聖書注解 新約1）。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

29日　礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ5・1〜11
タイトル　イエス様に従おう
暗唱聖句　そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。ルカ5・11
目　標　自分の無力と罪深さを覚え、キリストに従う者となる。

導入

（飯田勝彦）

皆さんにとって「カッコイイ生き方」ってどんなものだと思いますか？　苦しい時でも、目標を見失わず困難を乗り越え真っ直ぐに生きる人生って、かっこよくないですか。皆さんの周りにそのような生き方の人がいますか。一度限りの人生、一つのものに人生をかけて力強く、大胆に生きる者とされたいですね。

イエス様に従ったペテロたち

聖霊に満たされたイエス様は、神様の素晴らしい恵みを多くの人々に伝えるため、イスラエルの各地を回っておられました。そして多くの病人や汚れた霊に取りつかれた人を癒すなど、人々がびっくりするような奇跡も行われました。イエス様の噂は広まり、人々がイエス様のもとに大勢集まるようになりました。それは、イエス様の祈りの時間にさえ割り込んでくるほどまででした。

ある時イエス様は、ゲネサレ湖畔に立っておられると、大勢の群衆が神の言葉を聞こうと押し寄せてきました。イエス様はペテロの舟に乗り、そこから群衆に話をなさったのです。その後ペテロに「沖に漕ぎ出して、漁をしなさい」と言われます。しかし、漁師であるペテロは「イエス様、俺たちは一晩中、漁をしたけど取れませんでした。でも、イエス様が言われるなら」と、半信半疑で網を下ろしてみると、グッと重い手応えを感じました。ペテロが仲間を呼び、網を引き揚げると舟が沈みそうなほどの大漁だったのです。

この出来事に皆が驚いてしまいました。するとイエス様がペテロたちに「あなたがたは、人間をとる漁師になるのだ」と言われ、彼らはイエス様に従って行きました。しかも、すべてを捨ててイエス様に従って行ったのです。

イエス様に従う祝福

ペテロたちはすべてを捨ててイエス様に従いましたが、どんなものを捨てたと思いますか。仕事、自分の持ち物、家族、仲間、故郷などいろいろと挙げることがで

きるでしょう。ペテロたちは、すべてを捨ててもイエス様に従って行くことに価値を見つけたのです。彼らの人生は、どうなったのでしょうか。すべてを捨ててしまったので、貧しく惨めな人生になったでしょうか。それとも、神様の祝福をいっぱい受けた素晴らしい人生を歩んだのでしょうか。

その後、ペテロたちはイエス様の弟子とされました。イエス様と寝食を共にし、多くの人々に神様のこと、救いのことを伝えて周りました。しかし、未熟なペテロたちは、時々、失敗をしてしまうこともありました。イエス様が十字架にかかる直前、ペテロがイエス様のことを知らないと言い、また他の弟子たちは、十字架にかけられたイエス様のもとから逃げ去ってしまいました。でも、イエス様は復活されて彼らに現れてくださいました。さらには、聖霊が彼らの上に降り、復活のキリストを喜んで証しする者に変えられたのです。彼らはイエス様に従って祝福された人生を送ったのです。

イエス様は、あなたを選ばれる

イエス様は「あなたにもペテロたちのように、わたしに従って来なさい」と言われます。「僕は何も役に立たないからダメです」と思わないでください。イエス様が選ばれたペテロたちは、強く優秀な人ではありませんでした。ペテロは、イエス様の言葉に半信半疑であり、罪深い者でした。しかし、イエス様は、イエス様を主と認め、また自分の罪深さに気付いた彼をあえて選ばれたのです。

イエス様に従って損はありません。実際、多くの人々がイエス様に従い、最高の人生を歩んでおられます。すべてを捨てて従っていくなら、イエス様が必要なすべてを与えてくださいます。また、「イエス様に従っていきます」と踏み出す者に、イエス様が力強い御手をもって助けを与えてくださいます。

イエス様を知らずに罪の中で苦しんでいる人が多くいます。その人たちのために、イエス様はあなたを必要としておられます。

まとめ

皆さんは、イエス様にただついて行く群衆ですか？それとも弟子ですか？ イエス様は、弟子を求めておられます。イエス様に従う喜びと祝福を体験させて頂きましょう。

♪イエスさまについていこう♪（ホ117、イン82）

聖　書　ルカ5・27〜32
テーマ　罪びとを招くキリスト

（石田高保）

序論

イエス様の言葉はときに私たちの価値観や人生観を逆なでることがあります。それは主が過激なのではなく、人間の側が神の基準から外れているからです。

一、人は罪びとを憎む

ここで注目したいことは、イエス様が取税人を弟子に加えたことです。取税人といえばこの当時、最も忌み嫌われていた職業のひとつで、それはユダヤ人でありながらローマ人の手先となって同胞から不当な税金を取り立てていたからです。主が取税人や罪人たちと平気で付き合ったことは宗教家たちの間でスキャンダルとなり、非難される原因となったのも無理はありません。ほかの弟子たちも、とんでもない奴が入ってきたと迷惑したかもしれません。そのようなリスクにはお構いなく主は取税人を弟子としました。イエス様には彼がこの先、神様に大いに用いられるという青写真が見えていたのです。

マタイはイエス様の招きに即座に従い、楽して儲けられる仕事を辞めて主に従いました。そして自分の家にイエス様と弟子たちを食事に招きましたが、ほかにも取税人仲間や、罪人呼ばわりされていた人々も招きました。イエス様の弟子となる決意を表し、自分の救いについて証しをしたことでしょう。ところがこの喜ばしくも麗しい宴に水を差した人たちがいました。〈パリサイ人やその律法学者たちが、イエスの弟子たちに対してつぶやいて言った、「どうしてあなたがたは、取税人や罪人などと飲食を共にするのか」〉、当時の常識ではこう言うのも無理はありません。何しろ取税人は平然と庶民から収奪し、私腹を肥やしていたからです。いやしくも先生と言われる人物が、取税人たちと分け隔てなく付き合う神経がパリサイ人にはまったく理解できません。彼らには神の子の心がわからなかったのです。「だれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない」（マタイ9・17）、イエス様の新しい価値観は、パリサイ人の古い価値観には受け入れがたいものでした。人間の古い価値観を捨てなければ、神の国の価値観を人生に活かすことはできないのです。

二、神は罪びとを愛される

このようにパリサイ人たちは取税人を裁かれる対象と

しか見ることができなかったわけですが、イエス様はどうでしょうか。主は取税人を「病人」にたとえており、ご自分は彼らをいやす医者にたとえています。本当は病人であるにもかかわらずその自覚を持たなければ、医者にかかることもしないので、手遅れにもなります。けれども自分は病人であるという病識を持てば、医者にかかって適切な治療を受けることができます。取税人は自分が魂の病人である、罪人であるという自覚を持って医者なるイエス様の所へ行ったので、神の子にしていただくことができ、神のために用いられる人となりました。いっぽうパリサイ人は自分が魂の病人、罪人であることを認めようとはしませんでした。それどころかイエス様を亡き者にしようと画策し、それは成功します。

並行個所には「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」（マタイ9・13）とあり、大事なのは杓子定規な律法の適用ではなく、律法の本質である神の愛に根差した人へのあわれみであるということです。聖書的な生き方を四文字熟語にすれば、それは「敬天愛人」となるでしょう。私たちはみ言葉を大切にしていますが、それは詰まるところ身近な人を愛することにあります。自分の言おうとすること、しようとすることが、その人を愛することになるかを吟味したいと思います。

〈わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである〉、この場合の義人とは、自分を義人だ、正しい人間だと行いに照らして思い込んでいる人という意味です。こういう人にはイエス様でも救いに導くことができません。主は、自分を罪深い人間であると認めた人をこそ救うことができるのです。

マタイという名前はイエス様のつけたものであり、親のつけた名前はレビでした。マタイとは「主の賜物」という意味です。これ以降、自分の存在も人生も神様持ちであるという自覚を持ち続けたことでしょう。その能力を宣教のために用いられ、千古不滅の福音書を書き上げました。

結論

クリスチャンは十字架によって罪を全く赦（ゆる）されてはいますが、いつでも罪を犯しかねないという意味での罪人です。私たちの持って生まれた人間性では、罪と罪人とをわけることができません。しかし神は何があっても愛することを決してやめません。これをまず自分にあてはめ、そして他の人に適用しましょう。

研究資料

（金井由嗣）

文脈

カペナウムを拠点とした主イエスのガリラヤ伝道の中に位置づけられる。マタイ、マルコにも同じ記事がある。中風の人への罪のゆるしといやし、取税人レビ（マタイ）の弟子への招き、彼の家での食事とパリサイ人との論争、断食に関する人々と主イエスとの論争までが一区切りである。最後の記事は時間的に連続してはいないが、三福音書はすべて類似の論争記事として続きの位置に置いている（マルコとルカではさらに論争の記事が続く）。

パリサイ人・律法学者との関係

パリサイ人は中間時代に起源を有する律法解釈の一学派で、口伝律法を含めた律法の儀式的遵守に主な関心があり、律法的な穢れに対する分離主義的傾向が強かった。新約聖書で彼らはしばしば主イエスに向かって論争を挑み、主イエスは彼らの独善と偽善を強く非難しているが、その一方で彼らは主イエスの行く先々で教えを聞くために集まっており、また主イエスを食事に招くなど深い関心を寄せている。**律法学者**はしばしばパリサイ人とセットで出てくる。当時の律法学者には幾つかの学派があり、パリサイ派が多数を占めていたが、すべての律法学者がパリサイ派だったわけではなく、パリサイ派に属する人が皆学者だったわけでもない。

中心主題

罪人と積極的に交わり、彼らを悔い改めへと招く主イエスの生き方が、罪人に近づくことを拒否するパリサイ人との対比で浮き彫りにされている。この場合、「取税人や罪人」が祭儀的共同体から排除され、宗教的には社会の周縁に追いやられた人々であったことに注意する必要がある。主イエスの宣教は、社会の周縁に置かれていた人々を神の国へと招くことに強調点が置かれており、その点でユダヤ教における他の集団（特にパリサイ派）と一線を画すものであった（ボウカム参照）。

テキスト

27 そののち 中風の人に対する罪の赦しの宣言といやしの記事から連続している。ここでは主イエスのことばの権威に注意が向けられている。**わたしに従ってきなさい** との呼び掛けにレビが即座に従ったことも、主イエスのことばが権威をもって彼に働いたことを示してい

る。**取税人**は、当時ユダヤを統治していたローマ帝国に対して税金の徴収を請け負う人々である。余分な金額を徴収して差額を収入とする場合が多く、異邦の支配者の手先となっていることと併せてユダヤ社会では取税人であるというだけで「罪人」とみなされた。豊かではあるが会堂（シナゴグ）を中心とする神の民の共同体からは排除されていた。主イエスは、その取税人であったレビをあえて弟子として招かれたのである。

28 いっさいを捨てて 即座に**立ちあが（った）** ことと共に、レビの応答が即時の、徹底したものであったことを示している。この直後に自分の家で大宴会を催したのだから、「いっさいを捨てた」とは文字通り捨てることではなく、財産を含めた自分自身のいっさいを主イエスと神の国のために用いる決意を意味している。

29 イエスのために盛大な宴会を催した 主の招きに感動したレビの喜びがよく表れている。**そのほか大ぜいの人々** マタイ、マルコはこの段階で「罪人」という単語を用いているが、ルカはその表現を用いず、30節でパリサイ人と律法学者の口から出た言葉として記録している。一方的に人を「罪人」と決めつける彼らの狭い見方が、人を分け隔てしない主イエスの態度と対照的に描かれている。

30 イエスの弟子たちに対してつぶやいた 直接主イエスに対してではなく、弟子たちに対して批判の言葉が向けられるが、答えるのは主イエスである。初代教会において主の弟子たちが同様の別け隔てのない共同の食事を重視し、ユダヤ主義者から批判されていた状況に通じている（ガラテヤ2・11〜14参照）。

31 健康な人 マタイ、マルコでは「丈夫な人」。医者であるルカは元のアラム語を専門的な医学用語に訳すことでこの例えの効果を増している。

32 罪人を招いて悔い改めさせるためである 「悔い改め」の語は並行記事の中でルカのみに出てくる、ルカ文書のキーワードの一つである。罪人への分け隔てない招きが単なる食事の招きではなく、神の国に入る「悔い改め」（ギ）メタノイア、心の方向転換）への招きであることが示されている。

参考図書 鈴木英昭、榊原康夫、モリス、クラドック、Green、Bockの注解、ボウカム『イエス入門』、ジュリアス・スコット『中間時代のユダヤ教』。

6日　礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ5・27〜32
タイトル　罪人の友とならられたイエス様
暗唱聖句　わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔改めさせるためである。　ルカ5・32
目　標　罪人を招かれるキリストを信じ、従う者となる。

導入

（松浦みち子）

皆さんには、仲良しのお友だちがいますか？　ゲームの仲間ですか？　野球やサッカーの仲間ですか？　教会学校のお友だちですか？　イエス様はどんな人と友達になられたのでしょう。

きらわれ者のレビ

ある日、イエス様は取税所に座っているレビという名前の人に出会いました。この人の仕事は取税人でした。みんなから税金を集める人でした。わたしたちの国でも税金を集めて、様々な働きがなされています。皆さんの通っている学校は税金で建てられています。また、教科書も無料で配布されています。道路もでこぼこ道やぬかるみの道もありますが、アスファルトのきれいな道もあります。これらはみんな税金が使われてできているのですよ。「ふーん。税金って良いことに使われているんだな」と思った人もいるでしょうね。でも、レビさんは、町の人々から嫌われていました。どうしてでしょうか。

それは、レビさんの国ユダヤは、そのころローマ帝国の支配下にありました。そして集められた税金は全部ローマ人のものになりました。ところが、裏で取税人たちは必要以上のお金をユダヤ人から取り立てて、その一部をこっそり横取りしていたのです。ですから、ユダヤ人たちは取税人を嫌い、だれも友だちになろうとは思いませんでした。しかも、レビさんが町を歩いているだけで、「あのいやなやつがやって来るよ。」と、人々は避けて、親しく声をかける人はだれもいませんでした。

イエス様に見い出されたレビ

でもレビさんは、心の中でこんなことを思っていました。〈ふん、どんなに嫌われてもかまうもんか。お金さえあれば幸せになれるさ！〉と、考えていたのです。たくさんのお金で立派な家も建てました。おいしいご馳走もたらふく食べました。素敵な服も買いました。お金の

いっぱい入るがっしりしたカバンも買いました。レビさんは幸福になれたでしょうか。いいえ、やっぱり寂しそうな顔をして取税所に座っていました。どうして気持ちが晴れないのか、自分にもわかりません。そんなある日のことです。いつものように取税所にポツンと座っていると、ひとりの人が近づいてきました。そしてその人は、こう言ったのです。「わたしに従ってきなさい」。レビさんはびっくりしました。イエス様が近づいてきて、声をかけてくださったのです。しかも、イエス様の弟子にしてくださるというのです。レビさんは飛び上がるようにして、何もかも捨ててイエス様に従っていきました。

姿変わりしたレビ

レビさんは、「イエス様どうぞ、こちらに。」と言って自分の家にイエス様を迎えました。そしてイエス様のためにすばらしいご馳走を用意し、心からおもてなしをしました。また、レビさんの仲間の取税人やイエス様の弟子たちもいっしょに食卓を囲んで楽しい宴会が催されました。ところが、この様子を伝え聞いた、パリサイ人や律法学者たちが、ぶつぶつ、つぶやいて言いました。「どうしてあなたがたは、取税人や罪人などと食事をともにするのか」。イエス様はお答えになりました。「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」と。

レビさんの顔からは、もう暗い寂しげな表情は消え去りました。そして、喜びと笑いに満ちた輝いた顔に姿変わりしました。イエス様によって、罪がゆるされ、心の闇が取り除かれたのですね。何とうれしく幸いなことでしょう。

あなたは学校で友だちにきらわれたり、いじめられたりしていませんか。また、お家でも、何となく気持ちがふさいでつまらない思いで毎日を過ごしていませんか。救い主イエス様は、わたしたちに近づいて、「わたしに従ってきなさい」と一人ひとりに声をかけ招いて下さっています。「はい、従っていきます」とお答えしましょう。そうするなら、あなたの心はイエス様の愛でいっぱいになり、あなたのまわりにいる人達にも、喜びがつたわっていくでしょう。

♪しゅにしたがうことは♪（こ改119、こ53、ホ87他）

聖　書　ルカ2・41〜52
テーマ　両親に仕えるイエス

（石田高保）

序論

福音書は、イエス様のお生まれになったことについてはかなり詳しく書いていますが、30才までの生涯ついては、たった一つのエピソードしか書いていません。〈母はこれらのことをみな心にとめていた〉とあるので、ルカはイエス様の母マリヤに直接取材したようです。ルカはそのほかマリヤから主の生い立ちについてはいろいろ聞いていたはずです。しかし採用したのは今日の個所だけなのは、ここが私たちの救いと成長のためにどうしても欠かせない出来事だったからかもしれません。

一、神の子としての目覚め

ここではイエス様が12才であったと明らかにされています。当時の習慣では男の子の12才は成人式を迎え、大人の仲間入りをする年齢でした。主は郷里へ戻る両親や親戚の一行についていかないで三日間も神殿の中で過ごしていました。このこと自体があり得ないことですが、イエス様にはあり得ることでした。イエス様は当時第一級の学者たちと聖書について問答をしていましたが、彼らはその知恵深さに舌を巻いています。

〈どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか〉、これはとても謎めいた言葉です。〈両親はその語られた言葉を悟ることができなかった〉というのも無理はありません。イエス様はヨセフが本当の父親ではなく、神こそが自分の父であることをこの時点で悟っていたことが明らかです。「エルサレムの神殿こそ、自分の父なる神の家である。だからそこに居残っていてもそれは当然の成り行きであり、なぜ疑いを挟まれる必要があるのだろうか」、と言おうとしているのかもしれません。この出来事はイエス様の生涯において重大です。12才の時点でイエス様はすでに自分が神の子であることに目覚めたことになるからです。11才まではそのことは隠されていたので、普通に家族と一緒に帰っていました。しかしこの時を境に神の子の自覚をもって生きるようになりました。なお、メシアとしての使命を神から明確に示されることは18年後の30才まで待たなければなりません。

私たちも、イエス様を受け入れたとき、神の子とされた

ことに目覚め、神の家族に入れられ、そこからクリスチャンとしての成長の道が始まりました。私たちも父の子ですから常に父の家に住んでいることになります。教会だけでなく、私たちが家庭にいるとき、そこは父の家です。私たちが職場や学校にいるとき、そこも父の家です。私たちがどこに行こうとも、そこは父の家なのです。

二、神の子としての前半生

48節は、二日間も心配で探し回った両親に対する言葉としては理解に苦しみます。イエス様は真実を語っているのですが、両親にはその意味を悟ることができません。だからと言ってイエス様は両親をさげすんだわけではなく、〈それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった〉、これはイエス様の30才までの18年間の生き方を言い当てています。自分は神の子だからほかの人間とは比べようもなく偉いのだとは思わず、ヨセフの大工仕事を見習い、その後やもめとなったマリヤと弟や妹たちを養いました。収穫期には季節労働にも出て行ったかもしれません。天地を創造した神であり、人類の救いを完成することになる神の子が、一介の庶民としてこの地上を歩むとは、誰が想像できたでしょうか。

子どもに対する聖書の教えは「子たる者よ。何事についても両親に従いなさい。これが主に喜ばれることである」（コロサイ3・20）です。子どもが親に従うようにしつけることは、その子の生涯にわたって祝福となります。なぜなら親に従うことを身につけた人は、上に立つ人を敬うことができるようになるからです。学校の先生、クラブの先輩、職場の上司など、上に立つ権威に従うことができる人は、おおむねその道で成功できると言えるでしょう。〈イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された〉、神様の約束だからです。親に従うことを身につけた子どもは、究極の権威である神に従うことができます。ところが親に従うことを身に着け損なった人は、行く所々の上に立つ人に従うことができず、概して人間関係が空回りするようです。反抗心が普通以上に強いと、組織では長続きしません。ですから親たる者は自分の子どもが神に従い、自分より上の権威に従えるように育てるという長期的な視野を持って臨みたいものです。

結論

人に仕えることをとおして神に仕えていることがあります。そのチャンスはどこにでも転がっているのです。

研究資料

（小平徳行）

この個所は聖書中イエスの少年時代のエピソードを記す唯一の記事である。

テキスト

41 過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた 律法によれば、イスラエルの成年男子は年三度の宮もうでをするように定められていたが、この時代には、遠隔地の人々は過越の祭のみに参加する習慣になっていた。過越の祭はイスラエルのエジプト脱出を記念する祭（出エジプト12・1～20）でアビブの月（太陽暦の3～4月に相当し、後にニサンの月と呼ばれる）に7日間かけて行われていた（申命記16・1～8）。

42 イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のために上京した 男子は13歳から律法を守る成人と数えられるので、前年にその予習をさせるのが父親の義務であった。このことはイエスが律法の下に生れ、人間が神の前に置かれている立場に立たれたことを表している（ガラテヤ4・4）。

44 道連れ（ギ）スノディア） とは「共に道を行く人々」のことで、同郷の村人や親族、知人と一緒に都へ上って来た巡礼団。**一日路** 数十キロ程度。

46 イエスが宮の中で教師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた 当時、学ぶ者は教師の足もとに座って、話を聞いたり質問したりするならわしであった。

47 驚嘆していた この言葉は本福音書において、神の力が表された時に伴う人々の反応として用いられている（5・26、8・56等）。イエスの知恵は、神の恵みによる特別なものであった。

48 両親はこれを見て驚き この時イエスは両親にとって全く思いがけないところにおられた。**心配して** この語は、罪人が死後行く黄泉の火炎で「もだえ苦しむ」時にも使われている（16・24～25）。両親がこれほどの思いで捜し回ったのは、道連れからはぐれると、身の安全が保証できないからである。良きサマリヤ人のたとえ話（10・25～37）にあるように、エルサレムからエリコへの途上で強盗に襲われる可能性があった。人々が道連れで移動するのは、このような危険から守るためでもある。

49 ここはイエスの公生涯以前の唯一の記された言葉で

あり、本福音書における最初のイエスの言葉である。**わたしが自分の父の家にいるはずのこと**　神を「自分（わたし）の父」と呼ぶことは他に類を見ない特異なもの。通例は「われらの父」など。前節でマリヤがヨセフをさして「おとう様（直訳―あなたの父）」と語ったのに対して、イエスは神を「自分の父」と述べている。これはイエスと神との関係が特別なものであることを示すもので、イエス自身による「神の子」宣言である。**父の家**　直訳するなら「父に関わること」。イエスは、自分は神に関係のある所にいるのが当然ではないかということ。**はず**　この言葉は「神の必然」を表現し、キリストの受難予告（9・22）においても用いられ、「必ず～する」と訳されている。**ご存じなかったのですか**　かつて御使ガブリエルがマリヤに神の子を産むことを告知したにもかかわらず、知らなかったのですかということ。このことは少年イエスが12歳で既に天の父の定められた道に自覚的に歩み始められていたことを表している。

50　悟ることができなかった　この「悟る」とは、元々は「合わせる」という意味で、新しい事柄を既知の事柄と合わせて考え、理解するという意味。イエスの両親はこれまで自分たちに起った様々な事柄と、今回のイエスの言葉とを合わせて考えることができなかった。しかし、ガブリエルや羊飼いのたちの証言、シメオンやアンナの言葉を総合して考えるなら、確かにイエスは神の子であり、神殿はイエスの父の家なのである。

51　お仕えになった　は「服従させる」（ギ）ヒュポタッソー）という言葉から来ており、イエスは両親へ服従する立場に自らを置かれ、継続的に仕え続けられたことが表現されている。イエスは十戒の第五戒を実践された。このイエスの従順さは公生涯に入る約30歳まで、人々からは単に「ヨセフの子」と思われるほどに徹底していた（3・23、4・22）。神の子であるお方が、人間であるヨセフとマリヤと一緒に下って、彼らに仕えられたところに、神の子イエスのへりくだりがある。これはキリストへのつまずきにもなった。

参考図書　熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』、榊原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解・新約1』（以上いのちのことば社）、宮平望『ルカによる福音書　私訳と解説』（新教出版社）など

13日 礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ2・41〜52
タイトル　両親に仕えるイエス
暗唱聖句　それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった。
ルカ2・51
目　標　両親を大切にし、助ける者となる。

導入

（土屋開夫）

今日は母の日です。来月には父の日もあります。母の日や父の日というのは、お母さんやお父さんに対する感謝の気持ちを特に覚えるために、どちらもアメリカの教会で百年以上も前から始まりました。そう、教会から始まったんですね。

二種類の親

ところで皆さん、私たち人間には二種類の親がいるんですよ。分かっていますか？　一つは、霊（魂）の生みの親である「父なる神様」です。もう一つは、体の生みの親である、人間のお父さんとお母さんです。

聖書には、このどちらの親も大切にしなさい、と教えています。みんなもよく知っている「十戒」を思い出して下さい。最初の1番目から4番目は、一言で言うと、「父なる神様を敬いなさい」という教えです。

そして、それに続いて5番目に、「あなたの父と母を敬え。」という教えが続いています。

ですから私たちは、まず霊の親である「父なる神様」を敬い、続いて人間の両親を敬うことがとっても大事なんです！

子どもの時のイエス様

さて、子どもの頃のイエス様はどうだったのでしょう。今日の聖書の個所は、イエス様が子どもの時の様子が分かる、とても貴重な個所です。イエス様もみんなと同じように、赤ちゃんの時もあれば小学生ぐらいの時もあったんですよ。だからイエス様には、子どものみんなの気持ちがよく分かります。そしてイエス様は子どものお手本でもあるんですよ。

イエス様が12歳の時、「過ぎ越しの祭り」を祝うために、人間の両親であるヨセフさんとマリヤさんと一緒にエルサレムに行きました。国中の多くの人がエルサレムに集

まります。親戚のおじさん、おばさん、ご近所の人たちもみんな一緒にゾロゾロと旅をします。

やがて祭りが終わり、またみんなで自分の町までゾロゾロと帰ります。ヨセフさんとマリヤさんは当然、息子のイエス様も近くを歩いているだろうと思っていました。ところがイエス様の姿が全然見当たりません！　ヨセフさんとマリヤさんは三日間も探し回り、なんとエルサレムの神殿にいたイエス様を見つけました。

マリヤさんはビックリして、「心配したじゃないの！捜していたのよ！」と言うと、イエス様は「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」と答えました。イエス様にとって「霊の親」は勿論、父なる神様です。そして、神様を礼拝する場所である神殿は「父なる神様の家」であり、子どもであるイエス様の家でもあったのです。

でもこの後イエス様は、人間の親であるヨセフお父さんとマリヤお母さんと一緒にナザレの家に帰り、この両親を敬い、お父さんの大工仕事や、お母さんの家事のお手伝いをしたり、弟たちの面倒も見てあげた事でしょう。

最初に言った通り、イエス様は霊の親である父なる神様を敬い、愛し、そして人間の両親も敬い、愛していたのです。

まとめ

みんなのお父さんやお母さんは、神様のようには完全ではないでしょう。あなたが悪くない時でもイライラして怒ってしまったり、ガミガミうるさかったり、間違いや失敗、言い過ぎ、やり過ぎもあるかも知れません。

それでも、神様があなたに与えて下さった両親です。そして、神様のように完全じゃないけど、足りなさもあるけど、子どもであるあなたのために、一生懸命に色んな事をしてくれていると思います。

どうぞ、父なる神様を敬い、そしてお父さんとお母さんを敬い、大切にし、愛してください。イエス様がそうされたように！

♪わたしのように♪（ホ98、イン75）

聖　書　使徒1・3〜8
テーマ　聖霊の恵みを求める

（福井文彦）

序論

使徒行伝は、単に使徒たちの活動を述べたものではありません。それは聖霊が、どのように主の弟子たちを導いて、福音がユダヤ人社会から、異邦人社会に宣教されて行ったかを記した聖霊行伝です。この個所には聖霊に関する命令と約束が記されています。

一、キリストの苦難と復活

まずルカは、イエスの死後どのようなことが起こったかを述べています。それは、イエスは苦難を受けたのち、自分が復活して生きていることを示し、弟子たちにたびたび現れて、神の国のことを語られた、という出来事です。

すなわち、イエスは、私たちのために十字架上で死なれ、人間の罪の結果である死を克服して、よみがえられたのです。それは、弟子たちの目前で起こった出来事でした。復活されたイエスは、たびたび弟子たちに現れて、彼らが心の中で疑ったりする余地がないようにされたのです（Ⅰコリント15・5以下）。ですから、弟子たちは正真正銘、復活の出来事の目撃者にほかならないのです。

イエスは復活され、四十日後に弟子たちの見ている前で昇天されました（9）。その地上の最後の四十日の期間、〈神の国のことを語られた〉のです。神の国は、神の恵みが支配しているところという意味です。それは、イエスの生涯と十字架と復活を通して到来しました。しかし、この神の国は、まだ完全に実現したわけではなく、イエスの再臨によって初めて神の国は完成するのです。

二、父の約束を待って

〈食事を共にしているとき〉のことです。イエスは〈かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい〉と命じられました。さらに〈ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう〉（参考マルコ1・8）と約束されました。

この約束の言葉は、弟子たちに向かってなされたものです。待つというのは、ある時がくるまで何もせずに待つことですが、そのような期間が弟子たちには必要でした。なぜなら、弟子たちは自らの無能無力を知り、聖霊

の力なしには宣教できないことを徹底的に知り、聖霊に満たされる必要があったからです。

この時まで、弟子たちの霊的状態はどうだったでしょうか。彼らのうちの二人は地位のことで争っていました。また、サマリヤ地方に出かけた時、歓迎してくれなかったことに腹を立て「彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」（ルカ9・54）と言いました。ペテロは主イエスを三回も「知らない」と拒みました。弟子たちは皆、主の復活されたとき、あまりの恐ろしさに震え、戸を閉めて鍵をかけて隠れていました。

弟子たちは自らの無能無力を知らされ、互いに悔い改め、約束を待ったのです。

三、聖霊を受け、主の証人となる

主から約束を待つように言われた弟子たちでした。しかし、弟子たちは「今」お会いしているこのイエスが、イスラエルを復興されるのではないか、と期待していました。そこでイエスは弟子たちの質問には直接お答えにならず、二つのことをお答えになりました。一つは、時期や場合は、神が定められていること。二つには〈ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、…さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう〉ということです。

①この8節は偉大な約束です。〈聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受け〉ると、言われました。聖霊は神の賜物として受けるのです。

②聖霊は偉大な力です。この〈力〉はギリシャ語で「デュナミス」で、いと高い所から来る力です。その力の源泉は聖霊なる神ご自身です。

③聖霊はご人格を持った「お方」です。聖霊は私たちが罪に勝利できるようにし、清い生活を送らせ、愛のわざをさせ、私たちをイエスに似た者にしてくださいます。

④聖霊を受ける時、私たちは生活を通してキリストを証し、福音を大胆に語る証人となるのです。

結論

私たちがイエスの証人になるため、必要なことは、自らの無能無力を知り、聖霊を受け、聖霊に満たされることです。この聖霊は求める者に、従う者に与えられるのですが、信仰によって受けるのです（ガラテヤ3・14）。

研究資料

（宮澤清志）

テキスト

3 この節は、内容的には前節の挿入句としての役割をもっており、「お選びになった使徒たち」を説明する役割を果たしている。イエスは十字架から昇天までの四十日の間に、しばしば弟子たちに自らを現され、イエスご自身が本当に死からよみがえられ、生きかえられたのであることをお示しになった。具体的には福音書やパウロの書簡（特に最もよくまとめられている個所はⅠコリント15章）に記されている。**神の国** イエスの教え（1）の中心は「神の国」に関する教えであった。神の国とは、神の恵みが支配しているところ、という意味であり、イエスの生涯と十字架と復活を通して神の国が到来したこと、そしてイエスの再臨によって神の国が成就することを福音書は証しするのである。

4 イエスは、前節にあるように、自らが確かによみがえられたことを弟子たちに示すため、しばしば食事を共にされた（ルカ24・41～43、使徒10・41）。**エルサレムから離れないで** 弟子たちは、この時ガリラヤに戻ることを考えていたのかも知れない（ヨハネ21章にはそのことが示唆されている）が、イエスがユダヤ人に拒絶されたその場所で、弟子たちが聖霊による新たな第一歩を踏み出すことが神の御旨だったのであろう。

5 この約束は、バプテスマのヨハネによって予め示されている（マルコ1・8）。そしてイエスは、ヨハネのこの言葉が成就する時がいよいよ近づいた、と語るのである。旧約聖書の預言によれば、成就の日のしるしとして、神の霊がすべての人に注がれるであろう（ヨエル2・28～29）とある。ヨハネの水によるバプテスマは、悔い改めを迫ると共に、悔い改めた民をやがて来たるべき審判に対して備えさせ、預言者たちが語った霊のバプテスマを予め指し示したものであった。

6 **さて** 新しい物語の始まりに当たって、使徒行伝において用いられている書き出しの言葉。**主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか** ここで弟子たちがいう「国」とは神の国のことであって、弟子たちは旧約聖書の教えを文字どおりにとって、神の国がイスラエル民族の独立によって実現成就されるという考え方から抜け出すことはできなかった。この問い

は、福音書においても何回か問われている問いであって（ルカ19・11、24・21）、ルカはここにきてはじめてこの問いを直接イエスにぶつけた。

7 前節の弟子たちの質問に対して、主イエスは直接にはお答えにならない。**時期**（ギ）クロノス）**や場合**（ギ）カイロス） クロノスは、時間の経過を表す言葉であり、カイロスは、定められた時点を表す言葉である。特に、この個所のカイロスは、時間を支配するのが神であることを明白に示した言葉であり、この二つの言葉が重なって用いられていることは、終末に至る期間を指していると考えられる（Ⅰテサロニケ5・1）。

8 イエスは、かつて、弟子たちが考えていた政治力ではなく、それよりはるかに偉大な力が注がれるというのである。聖霊が彼らの上にくだる時に、力をいただくと語ったのである。その約束の聖霊は、旧約の時代から預言されていたもので（ヨエル2・28～29他）、バプテスマのヨハネによってその到来を告げ知らされていた（マタイ3・11他）。**力**（ギ）デュナミス） この「力」とは、単に証言する熱心さや迫力のことではなく、使徒たちが、特別に神から遣わされた者であり、主イエスがともに働いておられることの証拠としての「力あるわざ」（使徒2・22）のことである。また、この言葉は英語のダイナマイトの語源となった言葉であり、聖霊が与える力はダイナマイトのような大きな力であり、あらゆるものを粉砕し、砕く力がある。**エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで** 使徒行伝は、エルサレム（2～7章）、ユダヤとサマリヤの全土（8～9章）、地の果てまで（10～28章）というように、使徒行伝においては使徒たちが証人として派遣される範囲をも前もって明確に示している。**証人** ルカは、この言葉を「目撃者」以上の言葉として用いている。「わたしの証人」とは、ルカ24・46～48にあるように、キリストの苦難と復活と宣教されるべき赦（ゆる）しの福音の「証人」ということである。そのために聖霊による力が必要なのである。

参考図書 A. T. Robertson「Word Pictures in the New Testament Ⅲ」（BROADMAN）、斎藤篤美「新聖書注解 使徒の働き」、「聖書講解 使徒の働き 上巻」（いずれもいのちのことば社）他

20日 礼拝メッセージ例

聖　書　使徒1・3〜8
タイトル　聖霊降臨の約束
暗唱聖句　ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、…わたしの証人となるであろう。　使徒1・8
目　標　聖霊に満たされることの必要を知り、聖霊の恵みを求める。

導入

（後藤　真）

きょうはペンテコステです。ペンテコステは聖霊降臨日とも言います。聖霊がくだってこられたことを記念する日です。「そういえば教会では聖霊ということばをよく聞くなあ」と思った人もいるかもしれません。「聖霊って幽霊の仲間なの？　こわいなあ」と心配になった人もいるかもしれません。でも大丈夫。聖霊はわたしたちに力を与えてくださるお方なのです！

よみがえられたイエス様といっしょに

イエス様は十字架にかかって死に、お墓に葬られました。でも、三日目によみがえって弟子たちのところに現れてくださいました。そして四十日の間、何度も弟子たちの前に現れて、いっしょにごはんを食べたり、お話したりしました。

イエス様がいっしょにいてくださるだけで、弟子たちには勇気がわいたでしょう。イエス様は「エルサレムから離れないでいなさい。そして神様の約束を待っていなさい」と言いました。エルサレムには、イエス様を十字架にかけた人たちがたくさんいて、弟子たちも捕まる心配がありました。でもよみがえられたイエス様が言うのなら大丈夫だと思えたかもしれません。

神の国

イエス様は弟子たちに神の国のことを話しました。神の国というのは神様が王様として治める国です。そのころのイスラエルは、ローマという大きな国に支配されていました。弟子たちも、イエス様が王様になって、イスラエルが神様の国になることを願っていたのです。

弟子たちはイエス様に聞きました。

「イエス様が、王様になってイスラエルを立て直してくださるのはいまこのときですか？」

イエス様は答えました。

「いつ、神様の国ができるのかということは、あなたがたは知らなくてよろしい。それは神様が決めていることです」。

弟子たちは、目に見えるイスラエルという国が立て直されることを考えていましたが、イエス様は世界が造りなおされる、終わりのときのことを思っていたのです。

証人に！

イエス様は続けました。

「ただ、聖霊があなたがたにくだるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤ、サマリヤの全土、地のはてまで、世界中でわたしの証人となるのです」。

目に見えるイスラエルの国が立て直されるよりももっとすごいことがあります。それは、世界中でイエス様の証人となることです。イエス様が十字架にかかり、お墓に入り、三日目によみがえった方であることを証しする人、伝える人になることです。そして、イエス様を信じる人たちが、心を一つにして生きていくことです。

弟子たちにはイエス様を証しする力はありませんでした。イエス様が十字架にかけられたときには、怖くなって逃げ出したくらいおくびょうでした。弟子たちは弱くて、勇気がなくて、イエス様よりも自分がいちばんという人たちだったのです。

でも心配いりません。イエス様は、聖霊をくださることを約束して下さいました。聖霊は目に見えないけれどいつもいっしょにいてくださる神様です。聖霊がくだるとイエス様といっしょにいるのと同じです。おくびょうな弟子たちであっても、どんなにまわりに敵がいても、力強くイエス様を証しする証人とされるのです。

わたしたちもイエス様の証人になれます。もちろん自分の力でなるのではありません。聖霊に満たされるならわたしたちもイエス様を証しする力が与えられるのです。

イエス様のことをお話したら笑われるかなあとか、いじめられないかなあと心配な人がいますか。聖霊に力をいただきましょう。聖霊をくださいとお祈りしましょう。そしていっしょにイエス様の証人にしていただきましょう。

♪輝かせよ♪（PW41、イン87）

聖　書　サムエル上3・1〜14
テーマ　神の御声を聞く

（福井文彦）

序論

サムエルはモーセ以後に出た最初の大預言者であり最後の士師です。彼が仕えていた祭司エリは老齢のために指導力と霊的な鋭さを失い、彼に代わる後継者として、神の目はサムエルに向けられていました。そのため、神は経験もないサムエルに語られます。その結果、サムエルは「神を知り」、預言者としての一歩を踏み出すのです。

一、神に仕えたサムエル

ハンナには子どもがなかったが、その信仰と切実な祈りによってサムエルが与えられました。彼女は主に誓ったように乳離れした幼いサムエルをシロの聖所、エリのもとに連れて来て主にささげたのです（1・26〜28）。

それ以来、〈わらべサムエルは、エリの前で、主に仕えて〉いました。〈わらべ〉とありますが、必ずしも年齢的な「幼な子」ことではなく、歴史家ヨセフスは、サムエルは12歳を過ぎていたと言っています。ところがサムエルが育ち仕えた時代、エリ家を中心とする荒れすさんだ状況で、人の目をくらませ、神への思いを失わせていました。すなわち、霊的に枯渇していたのです。そのことを、〈そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった〉と述べています。

しかし、サムエルは夜、熟睡している時でも、間違いはしましたが、エリが呼んでいると思えば、直ぐ起きてエリの所に飛んで行きました。その姿からもわかるように、サムエルは熱心に喜びをもって神に仕えていたのです。このサムエルに神はお心をとめられたのです。

二、神の声を聞いたサムエル

〈神のともしびはまだ消えず〉とありますから、夜明け前の頃のことです。エリは〈目がかすんで、見ることができなくなり、そのとき自分の部屋で寝ていた〉のです。そのためサムエルは、〈神の箱のある主の神殿に寝て〉いました。

すると、主は〈サムエルよ、サムエルよ〉と呼ばれたのです。彼はてっきりエリに呼ばれたのだと思い、〈はい、ここにおります〉と言って、起きてエリの所に走って行きました。そして、〈あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります〉と告げたのです。ところが

エリは〈わたしは呼ばない。帰って寝なさい〉と彼に答えました。そこでサムエルは帰って寝ます。このようなことが二度、三度続きました。

なぜサムエルは、直接主が彼に語りかけておられるのに気がつかなかったのでしょうか。それは〈主を知らず〉にいたからです。サムエルの知っていた神は、日常のしきたりによって礼拝される神、エリを通して知る神でした。つまり、「主を知る」ことと「主について知る」ことは別なことです。「主を知る」ということは、み言葉によって、人格的、主観的な関係により、個人的に深く知るということです。その意味でサムエルは主を知らなかったので、何度もエリの所に行ったのです。

三度もサムエルがエリの所に来た時、老人のエリは、ようやく主がサムエルに語っておられるのだと悟りました。それで、再び呼ばれた時は、〈『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言いなさい〉とサムエルに教えたのです。

四度目も主は以前と同じようにそばに立たれ、〈サムエルよ、サムエルよ〉と呼ばれました。サムエルはすぐに〈しもべは聞きます。お話しください〉と答えました。こうして、サムエルは生まれて初めて神の声を、神の声として聞きました。その内容は神の人、エリの家への恐ろしい預言、想像を超えた厳しい宣告でした（11～14）。エリの家の咎は、いけにえによっても、穀物のささげものによっても、いかなる犠牲によっても永遠に償うことのできないものでした。

サムエルはのち、主の言葉によって現れた神を知っている者として、神の声を聞き、また神の言葉を語る預言者として、イスラエルの歴史の中で非常に大切な人物となっていったのです。

結論

私たちの信仰生涯の中で、「神の声を聞く」ことほど大切なことはありません。神は今も、サムエルのように、神の声を聞こうとする心備えのある人を求めておられます。

神の声を聞き続けるためには、神との交わりを持つことが基本です。そして祈りの内に神の声を聞きましょう。聖書を読んで、黙想し神の声を聞きましょう。人の声ではなく神の声を聞いて、サムエルのように自分を神にささげて従いましょう。

研究資料

（宮澤清志）

テキスト

1 わらべ　子（1・22）、幼な子（2・11）、などと同じ言葉。しかし、必ずしも年齢的な「幼な子」と考える必要はない。この言葉はいわゆる「若者」というニュアンスも持っており、どちらかといえば「未熟さ」を表す言葉であろう。なお、ヨセフォスという歴史家は、当時サムエルは既に12歳を過ぎていたと記録している。**主の言葉はまれで**　エリとその息子の時代の霊的低迷を反映している言葉かもしれない。また、過去の士師の時代とこれからの預言者たちの活動の時代とを分ける意味の言葉であるのかもしれない。

2 目がかすんで　エリ自身の高齢であることを示すと同時に、前週の物語よりかなりの時間の経過を示す言葉でもある。同時に4章以下の伏線ともなっている。エリの霊的な意味での「目のかすみ」を示す言葉である。またこのことが、サムエルが「聖所」に泊まってその務めを果たしていた理由とも考えられる。

3 神のともしび　出エジプト25・31～40に描かれている、7つの枝のある燭台ではないかといわれている。この燭台は、神の契約の箱が入れられている至聖所の外の聖所におかれていた。**まだ消えず**　夜明け前の頃のことであろう（レビ24・3）。**神の箱**　神の臨在の象徴とされた箱。中には契約の石板（十戒）が納められており、「契約の箱」と呼ばれる場合も多い。ヨルダン渡河ではこの箱を先頭にして祭司が立ち（ヨシュア3・13）、カナン入国後はシロの神殿に安置された。4章ではペリシテの戦いでこの箱が戦場に出陣してペリシテに奪われてしまうのだが（4・11）、後には返還されてキリアテ・ヤリムに安置される（7・1）。最終的にはダビデがエルサレムに移した（サムエル下6・12）。**サムエルが神の箱のある主の神殿に寝ていた**　前節にも記述しているように、エリの高齢のゆえかもしれないが、そのことをも主が用いてくださって、サムエルの召命という出来事を主が起こしてくださったとみるべきであろう。イザヤの神殿の幻（イザヤ6章）、ベテルにおけるヤコブの幻（創世記28・11～18）にも、神殿における召命は見て取れる。

4　聖書によって多少訳し方が異なるが、内容そのものには大差はない。

5〜9 このような物語の中で、反復の意図するところは重要である。これは、緊張感を高め、召命に対する現実感を聴衆に呼び起すのに一役買っている。一方で、祭司エリは勘違いをして3度にわたってこの少年を下がらせる。先週の個所と相まって、善良ではあるが霊的に少々抜けているエリの人柄を描き出している。

7 主を知らず 一般的な信仰や敬虔（けいけん）さの意味ではなく、個人的直接的語りかけ、という意味の「知る」。本節では、「主を知る」ということと、「主の言葉」とが並んで語られる。それは、主を知るということは、人間の知覚的、客観的な対象として「主を知る」ということではなくて、その御旨をみ言葉によって知るという、人格的、主観的な関係における「知る」ということなのである。

9 前節後半より、エリはサムエルの上に起こっている出来事を自らの経験によって察した。こうしてついにエリはサムエルに適切な指示を出すことができたのである。

10 主はきて立ち 語りかけるばかりでなく、目に見える形でそばに立った、すなわちここでサムエルは、言葉と幻の両方を受けたのである。この行為は、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」という信仰の姿勢に対する語りかけである。**立つ** 象徴的に「自分自身を現わす」ことを意味する。

11 耳が二つとも鳴る 想像を超えた厳しい宣告がなされるときの表現である。特に、災いの知らせやその知らせに圧倒されるときの慣用的表現でもある（列王下21・12、エレミヤ19・3）。

12〜14 エリは最後には、その息子たちと共に破滅の道へと歩まなければならない。これは恐ろしい現実である。彼の罪は、息子たちが何をしていたかを知っていたにも関わらず、彼らのその行いを見過ごし続けてきたからである。**かつてエリの家について話したこと** 2・27〜36。祭司の罪のためには犠牲の儀式によって備えがなされていた。しかし、それはあくまで誤って犯した罪のためである（レビ4・2）。しかし、エリの息子たちが犯した罪のように、彼らの冒涜（ぼうとく）的な行為に対しては、いかなる犠牲によってもとりなすことは不可能であった。**永久に** その裁きが徹底してなされることを物語る。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解 サムエル記』（いのちのことば社）他

聖　書　サムエル上3・1〜14
タイトル　神の声を聞いたサムエル
暗唱聖句　しもべは聞きます。主よ、お話しください。　サムエル上3・9
目　標　日々、神の御声を聞いて生きる。

導入　（松浦みち子）

皆さんは名前を呼ばれたら「はい！」って返事ができますか？　知らんぷりしたり、無視したりするのでなく、いつでもどんな時でも「はい！」と返事しましょう。とても大切なことですよ。そして、返事をしたら、その通りに行動する。そんな素直な心を神様は祝してくださいます。（ジョシュア・レノルズ作「祈るサムエル」の絵用意）

神様に呼ばれたサムエル

サムエルは小さいころから祭司エリ先生のところに預けられ、神様の仕事のお手伝いをするようになりました。お母さんから離れて寂しかったでしょうね。でもお母さんは、毎年神殿に礼拝に来るとき、サムエルにぴったりの服を祈りながら縫って持って来てくれるので、サムエルは、お母さんの愛の詰まった服を身に着け、ちっとも寂しくありませんでした。幼いながら一生懸命、エリ先生にお仕えし、掃除をしたり、明かりが消えないようにともしび皿を磨いたりして働きました。そして「神様のお役にたてますように」と、いつもお祈りする子どもでした（用意した絵を見せる）。

年を取ったエリ先生は、もう目がかすんで見えなくなりました。そして、神様のお言葉もほとんど聞くことができませんでした。そんなある夜のことです。サムエルがいつものように神の箱の置いてある神殿で寝ていると、「サムエルよ、サムエルよ」とどこからか呼ぶ声がします。「はい！　ここにおります」と飛び起きてエリ先生の寝室に走って行きました。「先生、何がご用ですか？」「いいや、わたしは呼ばなかったよ。帰って寝なさい」とエリ先生は言いました。サムエルは気のせいかなと思い部屋に帰って寝ました。しばらくすると「サムエルよ、サムエルよ」とまた呼ぶ声がします。サムエルはすぐに起きてエリ先生の所へ行き「はい、先生、お呼びになりましたか」。「いいや、呼ばなかったよ。サムエル、もう一度寝なさい」。サムエルは夢をみたのかなぁと、不思議に思いながら部屋に戻って寝ました。しばらくすると三度

目の声がします。「サムエルよ、サムエルよ」。今度こそ間違いではないとエリ先生のもとに走って行って「先生、お呼びになりましたか？　わたしはここにおります」と言いました。その時、エリはハッと神様がサムエルを呼ばれたことに気付きました。エリは「行って寝なさい。サムエル、神様がおまえを呼んでいらっしゃるのだ。今度お呼びになったら『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言うのだよ」と教えてくれました。「不思議なことだなぁ！」と思いながら、また横になりました。神様はもう一度、声をかけてくださるのでしょうか。

神様の声を聞くサムエル

しばらくすると「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声がしました。4度目です。先生に教えられたように「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言いました。神様はサムエルにこれから起こることをお告げになりました。それは胸の張裂けるような恐ろしい裁きの言葉でした。神様は「エリは、息子たちがひどく悪いことをしているのを知りながら、注意もせず、叱りもしなかった。エリの家の罪はどんなことをしても赦されない。わたしはエリの家に永久に罰を与える」という言葉でした。サムエルはひと言も聞き漏らさないように一生懸命耳を傾けました。サムエルが神様の言葉を聞いたのはこれが初めてのことでした。サムエルの最も大切な役割は、神様の声に耳を傾け、人々に正確に伝えることでした。エリの家の裁きを伝えることはつらい事でしたが、これもまた神様の言葉をまげないでつたえるというサムエルに課せられた大切な役割だったのです。

神様は、今の時代にも私たちに聖書を通して語りかけておられます。神様に心を向けて歩むならあなたにも神様は語りかけてくださいます。あなたは祈る時、何を最初に祈りますか？　自分のしてほしいことや欲しいものを願いますか？　祈る時、一番大切なことは、神様のみこころを知ることです。神様が何を願っておられるのかを聞く心で祈りましょう。「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と。あなたが聖書を読むとき、心の耳を澄ませて、神様の語りかけを聞きとる心で読むと、あなたにわかるように語ってくださいますよ。生きて今も働いておられる方ですから。なんとうれしい神様との交わりでしょう。

♪祈ってごらんわかるから♪（PW7、新聖歌481他）

聖　書　サムエル上16・6〜13
テーマ　心を見られる神

（福井文彦）

序論

イスラエルの最初の王であるサウルは、神への不服従のため主から捨てられました。サムエルはこのことをひどく悲しみましたが、いつまでも悔やみ続けることは許されませんでした。現実にサウル王がまだ支配しているにも関わらず、神は次の王を選ぶようにサムエルに命じられたのです。そこで選ばれたのがダビデだったのです。

一、人の選び

サムエルは神がサウルを捨てられたことを悲しんでいました。すると、「あなたをベツレヘムびとエッサイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとりの王を捜し得たからである」(1)と告げられたのです。そこで、サムエルはベツレヘムびとエッサイのところに出かけました。

主は、サムエルに、どの息子に油そそがれるかを明らかにしておられませんでした。エッサイの息子たちを見た時、サムエルは直感的に、神が選ばれたのは長男エリアブであると思ったのです。彼は背が高く、外見的には申し分がなく、王者の風格があったからです。年老いた父親も選ばれるのは長男であると考えていました。

ところが、主はサムエルに〈わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る〉と言われたのです。〈そこでエッサイはアビナダブを呼んでサムエルの前を通らせ〉ました。するとサムエルは〈主が選ばれたのはこの人でもない〉と言いました。そこでエッサイはシャンマを通らせましたが、サムエルは〈この人でもない〉と言いました。エッサイは七人の子にサムエルの前を通らせますが、サムエルは〈主が選ばれたのはこの人たちではない〉と言ったのです。

二、主の選び

神はこの家族を指示されたのに、その中に王に選ばれる者がいないなどということがあり得るのだろうかと、サムエルは一瞬思ったことでしょう。そこでサムエルはエッサイに〈あなたのむすこたちは皆ここにいますか〉と尋ねました。するとエッサイは〈まだ末の子が残っていますが羊を飼っています〉と答えました。彼は、兄たちがいけにえの食事を楽しんでいる間、羊の番をしてい

たのです。

この末の子がダビデです。彼がいけにえの席に呼ばれなかったのは未成年者はいけにえの食事の席につかないというしきたりのためかもしれません。しかも、羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族か召使がする卑しい仕事でした。ですから、彼は家族の中でそれほど気に止められていない一員であったと思われます。

しかし、神が人をお選びになる時、「外見」は関係ありません。神にとって問題なのは「心」です。それで、〈わたしが見るところは人と異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る〉と言われたのです。その意味は、「人は自分の目に従ってものを見るが、神は御自分の心に従って見られる」と言うことです。人間の弱さを知り尽くしておられるお方として、あわれみに満ちた心によって見られた結果、ダビデを選ばれたのです。

三、心を見られる神

ダビデへの油注ぎと同時に、主の霊がダビデの上に激しく下りました。後にサウル王の侍従となり、ゴリアテとの戦いで勝利し、名声は全国にとどろきました。しかし、このために王のねたみを買い、ここからダビデの苦難の生活が始まったのです。十数年の苦難の後、ギルボア山頂でサウル王が戦死し、ダビデは王となります。そして、エルサレムを礼拝の中心として、政教一致をはかり、敵国を徹底的に撲滅し、王国の拡張と繁栄をもたらします。彼の成功の秘訣は、ただことごとに主に聞いて行うことでした（サムエル下5・17～25）。

しかし、このダビデにも失敗がありました。バテシバの事件、子どもとの血を血で洗うような争いです。また晩年ダビデの行った人口調査は神の怒りと裁きを招きました。ダビデは偉大な指導者でしたが、このように完全無欠ではありませんでした。しかし、絶えず砕かれた心をもって悔い改め、神の赦（ゆる）しと恵みにあずかりました。それゆえに、神に愛されたのです。神は心を見られますが、偽善でない心、砕かれた心、混じりけのない純粋な心で神を求める人を喜ばれるのです。

結論

心を見られる神に喜ばれる秘訣は、キリストの血に対する信仰（ヘブル9・13～14、Ⅰヨハネ1・7）と純粋な心で神を求めることです。

研究資料

（宮澤清志）

先週より、「サムエルと王たち」という単元である。特に、先週の個所では、サムエルの幼少時代を通して「日々、神の御言葉を聞いて生きる」（目標）ことの必要性が語られた。

さて、本日の聖書の個所は6節からであるが、この個所は1節から始まる。サムエルはサウルの失敗をいつまでも悔やみ続けていることはゆるされなかった。主はサウルを退けるだけで、王位自体の存続については御心を変えることなく適材を探し求められたのである。

一方サムエルは非常に恐れた。なぜなら、このことがサウルに見つかれば殺されてしまうのではという恐れがあったからである。しかし、天の下のすべての事は、神のイニシアティブのもとで進行する。私たちの信仰は、このイニシアティブをとられる神に全権を明け渡し、注意深く、かつ大胆に従っていく信仰でなくてはならない。本日の中心であるダビデへの油注ぎの個所も、神がイニシアティブをとられた典型ともいえる個所であり、その従い方は、形だけの従い方ではなく、心からの従い方でなくてはならないのである。

テキスト

6 エリアブ　「神は父」という名。サムエルは、エリアブの美丈夫さに強い印象を受け、彼こそが油注がれるにふさわしい人物であると判断した。

7 顔かたちや身のたけを見てはならない　サウルが誰（だれ）よりも背が高かったこととの意図的な対比が語られているのかもしれない。しかし、この容姿が、彼が適任であることを妨げるものではない。外的な容姿それ自体は神からの好意のしるしである（9・2、10・23のサウルの姿や12節のダビデの姿を参照）。**わたしが見るところは人とは異なる**　直訳は「人が見ることではない」この言葉は預言者的格言となったのであろう（歴代上28・9参照）。**人は外の顔かたちを見、主は心を見る**　サウルは誰しもが賛美する背の高さ、美しさによって選ばれたが、ダビデは「心を見る」主によって選ばれた。

10 七人の子にサムエルの前を通らせた　サムエルはエッサイの7人の息子を年齢順に通らせたのであろうが、その誰も、主はお選びにならなかった。具体的に、

サムエルは神意を伺うのにどのような方法を取ったのかは定かではないが、彼はサウルを選ぶにあたってはくじを用いた（10・20参照）。よって今回もくじを用いて神意を伺ったであろうことは推測できる。こうして彼はこの7人の息子のほかにも子がいたのであろうと推測したのであろう。なお、この当時の神意を測る一般的な方法は、くじであった。

11　まだ末の子が残っていますが羊を飼っています　父エッサイがダビデをこの席に呼ばなかったのは、当時のしきたりで未成年者はいけにえの食事の席にはつかなかったということが考えられる（5節には、サムエルがこの席を設けた理由が語られる）。しかし同時に羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族か召使に託された卑しい仕事であった。

12　血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人　ここに、いわゆる「紅顔の美少年」という言葉を当てはめるべきではない。当時、こうした外見上の美しさは神の恵みと考えられていたし、サウルもまたそうであった（9・2）。しかし、聖書における美しさとは、外形上のことだけでなく、優美な魅力と強い意欲、行動をも伴ったものであった。イザヤ53章の主イエスのお姿をここで思いめぐらすことは必要なことであろう。

13　彼に油をそそいだ　旧約聖書においては、王と祭司は頭に油を注がれる行為をもって就任した。この油注ぎは、神の代理者をもって行われた。この「油注がれた者」が神の民を統治するとき、神は油注がれた者を通して王権を行使されたのである。その結果、**主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ**　将来において何が待っていようとも、神の備えがあるということの確信となり、また保証ともなった出来事であった。

なお、この言葉とともに、次節の「主の霊はサウルを離れ…」という言葉も同時に思いめぐらすべき言葉である。

参考図書　ジョイス・G・ボールドウィン『ティンデル聖書注解　サムエル記』、榊原康夫「新聖書注解　旧約2『サムエル記第1』」（以上いのちのことば社）、山我哲雄「新共同訳旧約聖書注解Ⅱ『サムエル記上』」（日本基督教団出版局）他

3日　礼拝メッセージ例

聖　書　サムエル上16・6〜13
タイトル　心を見られる神様
暗唱聖句　人は外の顔かたちを見、主は心を見る。
サムエル上16・7
目　標　心を見られる神に喜ばれるよう生きる。

導入

現代社会はあちらこちらに無人カメラが設置されていますね。何か事件が起こると、防犯カメラに映った映像から犯人が浮かび上がってきます。しかし、どんなに性能の良いカメラでもわたしたちの心は映し出すことができません。わたしたちは外側の見た目で多くのことを判断しがちです。人間を見る目もそうです。しかし、ちょっと待ってください！　人目につかないで黙々と歩む人の中に大きな力が潜み隠されていることがあります。今日はそんな人のお話です。

（松浦みち子）

エッサイの子どもたち

ある日、神様が預言者のサムエルに語られました。「サムエルよ。わたしはイスラエルの国の新しく王になる人を見つけました。ベツレヘムに住むエッサイの子たちの中にいます」と。神の声を聞いたサムエルはさっそくベツレヘムへと出かけました。するとエッサイは七人の息子たちを連れてサムエルに会いにきました。エッサイは長男から順番に息子を紹介しました。「これが長男のエリアブです。」サムエルは彼を見て、一目で気に入りました。「おお！　背も高いし、きりっとした顔立ちをしている。頭もよさそうだし、これが王様になる人だ」と思いました。しかし、神様はサムエルに「顔かたちや背の高さなど、見た目で決めてはいけません。わたしは人の心を見て決めるのです」とおっしゃいました。二番目の息子、三番目、四番目と続き、七番目の息子までサムエルに会いました。しかし、神様は「この人ではない」「この人でもない」とおっしゃるのです。いったい、どうしたことでしょう。神様はエッサイの息子の中にいるとおっしゃったのに。

羊飼いの少年ダビデ

サムエルはエッサイに尋ねました。「あなたの息子さんは、これで全部ですか？」「いいえ、もう一人いますが、末っ子のダビデは野原で羊の番をしています」。サムエルは「すぐにその子を連れてきてください。その子にも

会いましょう」。しばらくすると末っ子のダビデが走ってやってきました。日に焼け、いかにも健康そうです。目がキラキラ力強く輝き、元気いっぱいの少年でした。「こんにちは！」と元気よく挨拶をした瞬間、神様はサムエルに「わたしが選んだのは、この子だ。さあ、この子に油を注ぎなさい」。サムエルは、神様のおっしゃるとおりにダビデに油を注いで、祝福の祈りをしました。何のことかさっぱりわからないダビデは目をパチクリするばかりでした。しかし、この日から、ダビデには神様の霊が豊かに働くようになり、日々の歩みを祝してくださいました。ダビデの油注ぎは、王として神様に選ばれた印でしたが、サムエルのほかはまだだれもその意味を知りませんでした。

その後のダビデ

ダビデは油注ぎを受け、選ばれたからといってすぐに王様になったのではありません。サムエルが帰った後、また野原に行き、羊の番をしながら過ごしていました。ある時は、たて琴を奏でながら神様を賛美しました。夜の野宿の時には、空いっぱいの星を見ながら、神様の偉大さに心ふるわせました。そんな平和な日々が続いたのではありません。その後、さまざまな試練に会いました。ある時は、命を狙われ、死の一歩手前まで追い詰められたこともありました。しかし、神の賜物と召命とはかわることがありません（ローマ11・29）。金が純金となるために何度も炉の中を通されるように、ダビデは神様の訓練を受けました。神様は、ダビデの主に従う信仰や忠実さ、熱心さをごらんになりました。やがての時、ダビデは全イスラエルを統一し、国を建立する王として用いられたのです。

最後に、いつも叱（しか）られてばかりで、自分に自信のない人、失敗ばっかりでダメだと思っている人へ。こんな人がいたらがっかりしないでくださいね。人の評価と神の評価は異なります。学校の成績もあまり気にすることはありません。「くまのプーさん」作家のミルンさんは通信簿に「ひどい出来だ。彼はまったくやる気を見せない」と書かれたそうです。しかし後に世界中の子どもを喜ばせる作家となりました。神様はあなたを愛しておられます。心を見られる神様に喜ばれる歩みをしましょう。やがての時、きっとあなたを用いて下さいます。

♪こどもよどこをみてる♪（ふ22）

聖　書　マタイ6・25〜34
テーマ　思い煩いからの解放

（福井文彦）

序論

人間が毎日生活していく上で食物や衣服は必需品です。イエスは空の鳥を養い野の花を装ってくださる天の神が配慮し、それらを与えてくださるのだから、その神を信頼して〈思いわずらうな〉と戒められました。

一、神への信頼

イエスはまず〈空の鳥を見るがよい〉と言われました。彼らは生活のために働くことは全くありませんし、食べ物を蓄えたりもしません。その彼らを神は養ってくださるのです。彼らは天の父が与えられるものを集めるだけです。まして、神は人を鳥よりも、〈はるかにすぐれた者〉として創造されたのですから必ず養ってくださいます。だから、ただ神を信頼することです。

次にイエスは〈野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい〉と言われました。野に咲く花は〈働きもせず、紡ぎもしない〉のです。それでも神は〈ソロモン〉の〈栄華〉、その人工美よりも、美しく飾られました。神は人よりも劣るものをこのように装われるなら、人間にもっと深い配慮をなさるはずです。だから、ただ神を信じることです。

人は働き、紡がなければなりません。しかし、これら一切のことをなし終えたら、あとは神の摂理にすべてを託すべきです。人は空の鳥を養われ、野の花を美しく飾られるのは〈天の父〉であるという信仰をもって、神に信頼することです。

二、思いわずらうな

25節から34節には〈思いわずらう〉（新改訳では「心配する」）が六回出ています。それに対してイエスは〈思いわずらう〉ことが不必要である理由を語っておられます。①神は造られた〈空の鳥〉〈野の花〉を養ってくださるのですから、それらよりすぐれた私たちを養ってくださるのは当然です（26、30）。②私たちはいくら〈思いわずらっ〉ても〈自分の寿命をわずかでも延ばすことができ〉ないのです。人間の寿命は神が定められることですから、いくら思いわずらっても、少しも延ばすことはできません。それと同じように、いくら〈思いわずらっ〉ても問題の解決に

はならないのです。

③父なる神は食物や衣服（人間の生活必需品）が私たちに必要なことをすべて知っておられます（32）。そのために愛をもって配慮し備えてくださいます。神は決して物質的な必要を軽視したり、無視したりはなさらないのです。だから心配するよりまず神を信じることです（8）。

④あすのことを思いわずらってはならないのです（34）。人生にはその日その日の苦労があるのですから、一日一日の責任を果して生きることです。〈あす〉（未来）のことは、神がご支配しておられるのですから思いわずらう必要がないのです。

三、まず神の国と神の義を求める

そこでイエスは〈まず神の国と神の義とを求めなさい〉と命じられました。〈神の国〉とは神のご支配のことであり、〈神の義〉とは神の正しさのことです。ですからそれは、私たちの生活と周りのすべての事において神の御支配と、神のみこころと栄光の現されることを求めて生活することです。言い換えると、自分中心の生き方ではなくて、神を主にして自分を従とする生き方です。それは、神に信頼し、服従して生活することです。

〈そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう〉とイエスは約束されました。

〈これらのもの〉とは食物や衣服だけではありません。私たちが人間として生きて行くときにはそうした物質的必要のほかに、非物質的なたくさんの必要がありますが、それらも含まれています。例えば、健康、知恵、才能、霊的なものもそうです。それらはみな、人間は神によって生かされているものであるとの自覚に立って、神に信頼し、服従して歩むなら備えられると、イエスは言われました。そのような生き方こそは私たちを〈思いわずらい〉から解放して、平安を与え、神の目標に向かって働くものとするのです。

結論

最も大事なことは、〈神の国と神の義〉を求めていくこと、すなわち、神に信頼し、服従して生活することです。そうすれば、食物や衣服という物質的なものだけでなく、霊的なものにおいても、空の鳥を養い、野の花を装われる天の父は、豊かに与えてくださいます。

研究資料

（宮澤清志）

イエスが主の祈りの後に弟子たちに教えられたことは、天の御国の中での弟子たちの歩みであった（6・19～7・12）。新しい契約の中で、御国の民がどのように生きていくべきかを積極的な側面から教えられたものである。その中のひとつとしてこの個所からイエスが教えられたものは、思いわずらいを捨て、神に全面的に信頼していく生き方である。

テキスト

25　何を食べようか、何を飲もうか、…何を着ようか　この当時の思いわずらいのもとは、食べ物、飲み物と着るものだったようである。イエスは、これらの思いわずらいの代表的な要素を並べ立てて、思いわずらってはならないとお命じになったのであろう。**思いわずらう**　もとの意味は「いろいろな部分に分裂する」という意味の言葉である。また、この言葉はそのような思いわずらいを中止せよ、という強い命令形で述べられている。ルカ10章に登場するマルタは、まさにこのような状況だったと言える（ルカ10・41～42）。彼女は、なくてはならないただ一つのことに心を傾けるのではなく、必要ではない多くのことに心を裂かれていた。

26～27　私たちが読み違えてはならないことは、この節は、前節からの「思いわずらいからの解放」という文脈に沿って読むべきであって、空の鳥のたとえを人間の労働にからめて読んではならない。**空の鳥**　ルカの並行記事では「からす」となっている（ルカ12・24）。**まくことも、刈ることも**　農業におけるこれらの行為は、当時、男性の代表的な仕事とされてきた。したがって、この節では、男性に対する思いわずらいからの解放を述べているのであろう。**あなたがたは**　強調された言葉であり、鳥に比べてあなたがたこそ、という意味合いの強い言葉であろう。

28～30　こちらも前節までと同様に、「思いわずらいからの解放」という文脈の中で読むべき個所である。**野の花**　新改訳では「野のゆり」となっているが、本来的な意味は「野生の花」という意味であり、特定の花を指す言葉ではないようである。**紡（ぐ）**　この仕事は当時の女性特有の仕事だったようであり、前節までの男性と併せて、女性にも思いわずらいからの解放を、野の花のた

とえを通して語られたものであろう。いずれにしても、重要なことは、野の花が短命であるにもかかわらず(30)、神はそれらを着飾らせ、養っていて下さる、ということである。**信仰の薄い**　「信仰がない」と語られていないことに注意したい。直訳すれば「信仰の小さい（少ない）者」という意味である。この言葉はマタイが好んで用いた言葉で（8・26、14・31、16・8、17・20、他にはルカ12・28のみである）、いずれも弟子たちにだけ用いられた言葉である。具体的には、信じるとは言いながらも実際はまったく信じていないことを指す言葉であって、信仰の不完全とか未熟さを表す言葉ではない。

31　思いわずらうな　25節の言葉とは文法的に少々異なり、更に強い禁止の言葉となっている。

32　これらのもの　原文ではこの言葉が文頭に置かれている。これらのもの、すなわち食べ物、飲み物、着るものなどが強調して語られている。**異邦人**　ここでいう異邦人とは、ユダヤ人に対する異邦人という意味ではなく、天の父を知らないすべての人々を指す（5・47、6・7）。

33　これまでは「思いわずらうな」という、神の民の消極的な生き方を取り上げてきた。この節は、一歩進んで神の民の積極的な生き方を述べる。**神の国**　神がご自身の恵みをもって支配されることであり、また「天の神がご支配される力強い出来事」を指す。更に、山上の説教との関連で語られるなら、主の祈りを真に生き、祈る神の民の姿として現れる。**神の義**　全被造物に対する神の救いの御計画とみることができる。**求めなさい**　求め続けるように、という意味。この命令は、生涯をかけて人間が求め続ける必要があるものである。**与えられる**（神によって）加えて与えられる、たくさん与える、という意味の言葉であり、神は、求める人に対して、その人に必要なものを備えて下さる、という意味をもつ。

34　ルカの並行記事には存在しないマタイ独特の言葉。思いわずらってはならないことを再度警告されたのであろう。人間にとっては「明日」という日は死ぬまで存在する。しかし、明日のことは誰（だれ）にもわからない。ゆえに、このわずらいから解放される道は、明日を支配される神を信じて、その神に自分のすべてを明け渡すことである。

参考図書　中澤啓介「マタイの福音書註解（上）」（恵友書房）他

聖　書　マタイ6・25〜34
タイトル　空の鳥野の花
暗唱聖句　野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。　マタイ6・28
目　標　必要をそなえてくださる神を信頼し、心配しないで生きる。

導入

回転寿司に行くと、いろいろなメニューが並んでいます。「どれにしようかなあ」「まぐろがいいなあ」「たまごにしよう」「ハンバーグのお寿司もあるよ」わたしたちはそんなふうにたくさんある食べ物の中からどれを食べようかと迷います。でも、イエス様のころの人たちはそうではありませんでした。

（後藤　真）

何を食べようか、何を飲もうか?

そのころは、いまと違って食べ物がたくさんあるわけではありませんでした。スーパーもコンビニもありません。また服も、王様や特別なお金持ちでなければひとりで何着も持っているわけではありませんでした。

だからイエス様のころの人たちには、「きょう食べるパンがあるかなあ」「いま着ている服が破れたら着るものがないなあ、どうしよう」

そんな心配をしなければならないことがあったのです。どうすればそういう心配がなくなるでしょうか。お金持ちになれば心配がなくなるでしょうか。

でもイエス様はそんな人たちに言うのです。

「神様を大事にすることとお金を大事にすることと両方はできないよ。何を食べようか、何を飲もうかと自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと自分のからだのことで心配するのやめなさい」。

そんなこと言われても、心配だよ!という声が聞こえてきそうです。イエス様がパンをくれたらいいのにと思っていた人もいたでしょう。

神様がよくしてくださる

イエス様は続けます。

「空の鳥は畑を耕さないけれど、神様が養ってくださるでしょう。野の花は服を作らないけれどきれいに着飾っているでしょう。神様があなたがたにもっとよくしてくださらないはずはありません」。

聞いていた人たちはドキッとしたでしょう。空の鳥、野の花だけではありません。魚も、ちょうちょも、森の木も、お金や、食べ物や、着る物の心配なんかしません。

「心配したからといって、自分のいのちを長くすることはできないでしょう」

とイエス様は言います。心配してもむだだからあきらめなさいということではありません。神様がわたしたちのいのちやからだを守り、養ってくださる。わたしたちが心配してもどうにもならないけれど、よくしてくださる神様におまかせすれば心配はなくなるのです。

神の国と神の義を求めなさい

ただ心配しないというだけではありません。イエス様はもっとすばらしい生き方を教えてくださいました。それは「神の国と神の義」を求めることです。

神の国とは、神様が王様として治めることです。わたしたちが神様を王様とし、イエス様を主として従うときそこに神の国ができます。神の義とは神様の救いのご計画のことです。「神の国と神の義を求めなさい」なんて聞くと、何か難しいことのように思えます。でもそれは、わたしたちがこの世界を救ってくださる神様を信じて、みことばに従い、イエス様の喜ぶことを思って毎日生きるということなのです。

イエス様も人として生きられ、疲れたり、お腹がすいたり、眠くなったりという経験をし、わたしたちに食べ物や着る物がいることをよく分かってくださったでしょう。また、神様はわたしたちを造られた方です。わたしたちに何が、どれくらいいるのが、何がいらないのかということを、わたしたち以上に知っていてくださいます。

パンや着る物はどうでも良いのではありません。神様がわたしたち一人ひとりに、本当にいるものをいるだけ与えてくださるのです。神様はそこまでわたしたちのことを愛してくださるのですから、わたしたちもそれにこたえて神様を愛したいと思います。

もし心配なことが起きたら、神様にお祈りしましょう。神様はわたしたちにいるものをくださることを思い出しましょう。心配なことに心を向けるのではなく、イエス様のことばや思いに心を向けてゆきましょう。そこに本当の安心があるのです。

♪イエスさまがいちばん♪（ホ68）

聖　書　マタイ7・7〜12
テーマ　天の父への祈り

（福井文彦）

序論

私たちは神の子とされ、神の子の霊を与えられ、「天のお父さま」と言って祈ることができる者にされたのです。そのために大切なことは、本当に必要であるとの告白を与えてくださるのは、天の父なる神であるという信仰の確信です。

一、祈り求めよ

イエスは祈り求めなさいと言われました。しかも〈求める〉ということばを一度や二度でなく、五度も繰り返し、祈り求めることの大切さを教えられました。そして、その祈りが聞かれるために〈求めよ〉〈捜せ〉〈たたけ〉と。そうすれば、〈与えられる〉、〈見いだす〉、〈あけてもらえる〉と約束されたのです。すなわち、三重の異なった動詞をもって、祈りが答えられる確かさを示し、疑いを持つことなく祈り求めなさいと教えられたのです。多くの人々は祈っても、それが本当に聞かれるという信仰の確信を持てないでいるのではないかと思います。それは天の父なる神が答えてくださるとの信仰を持っていないからです。

しかし、人は誰（だれ）でも銀行で金銭の取り引きが、郵便局では郵便物の手続きが、食料品店で食物を求めることができると納得することができます。そのように祈りというものが、神に聞かれ、応えられるとの信仰の確信を持っている人は、誰からも強制されなくても祈るものです。

二、求め続けよ

イエスは、落胆しないで、目的を果すまで祈り続けなさいと三つの動詞で教えておられます（7）。すなわち、〈求めよ〉、〈捜せ〉、〈門をたたけ〉です。この〈求めよ〉、〈捜せ〉、〈門をたたけ〉ということばは、原文では、「求め続けなさい」、「捜し続けなさい」、「門をたたき続けなさい」という意味があります。ですから、〈求め〉ても与えられないからといって、あきらめてはいけません。もし、〈求め〉ても与えられないとするなら、もっと自分から積極的に〈捜〉してみなさい。それでも見出せなかったら、放っておかずに手から血が出るまで〈門をたたき続けなさいということです。

そのことはイエスご自身の祈りの生活の中にも見られ

ます。主は早朝、人を避けて祈られ（マルコ1・35）、徹夜で祈られました（ルカ6・12）。特に、十字架の前夜のゲツセマネの祈りでは、血のしたたりのような汗を流して祈られたのです（ルカ22・44）。その祈りは非常に激しいものであったとヘブル人への手紙に記されています（5・7）。イエスはこのようなご自分の体験を通して、祈りが神に聞かれるためには、「求め続けよ、捜し続けよ、門をたたき続けよ」と、あきらめずに熱心に求めて祈ることを教えられたのです。

三、祈りに答えてくださる天の父

イエスはここでは、祈りに答えてくださる神を、地上における子どもと父親にたとえておられます（9～11）。私たちがイエスの御名をもって祈るとき、私たちと神との関係は奴隷と主人、富める者と貧しい者のような関係ではありません。父と子との関係であり、しかもこの世の親子関係以上の関係なのです。

自分の子どもがパンを求めたときに石を、魚を求めるときに蛇を与える父親はいないでしょう。〈あなたがたは悪い者であっても〉とは、心が堕落して弱さと悪を持ち合わせている者であっても、の意味です。それでも〈自分の子供には、良い贈り物をすることを知っている〉のです。それは父親の愛のゆえです。ましてや、天の父なる神は愛の源であり本体であり、善にして、人の心を深く洞察できるお方です。ですから、肉親の父親以上に〈求めてくる者に良いものを〉くださるお方なのです。

神は良いものだけをお与えになるお方であり、神がお与えになるものは、いつも決まって最善のものです。だから私たちは大きな願望をもって神のもとに行き、必要としているものを求め、しかも不動の信仰をもって、神が良いものを与えてくださるようにと願うことができるのです。神は私たちをこの上なく愛しておられるので、正しく歩む者に有用有益なものを下さるのです。神は、私たちに最善なものが何であるかをご存じですから、その最善のものを与えてくださいます。

結論

人間の親子関係でも、子どもは屈託なくどんな心配事でも父親のもとに持って行きます。そのように、私たちも天の父なる神に熱心に祈り求めましょう。神が祈りに答えて良きものを与えてくださることを信じて祈り求めましょう。

研究資料

（中島啓一）

求めよ、捜せ、門をたたけという三重の命令は、父なる神に対し揺るぎない信仰を持って祈るようにという招きである。親の愛は地上における大きな愛の代表と言えるが、天の父はそれすらも比較にならないほど真実な愛を注いでくださるお方である。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」との黄金律は、その神からの真実の愛を受けているという大前提があってこそ、意味を持つものなのである。

テキスト

7　求めよ…捜せ…門をたたけ…　三つの命令はすべて現在形で、「～続けよ」と動作の継続が命じられている（ルカ11・8、18・3参照）。並行個所であるルカ11章では、この命令の前に、長旅で疲れた友人のために隣人にパンを求める人のたとえが語られている。求め、捜し、門をたたくという三つの動作に段階を見いだす解釈もあるが、外してはならない中心的なポイントは、「とにかく熱心に祈り求めよ」ということであろう。「もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会うと主は言われる」（エレミヤ29・13～14）との約束でも、「一心に」求めることが条件とされている。**そうすれば、与えられるであろう…見いだすであろう…あけてもらえるであろう**　これらは「神的受動態」と呼ばれ、与え主は言うまでもなく神ご自身である。

8　すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである　21・22の「祈のとき、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」との約束と比較するときに、そちらの約束が「もしあなたがたが信じて疑わないならば」（21・21）と条件付きであるのに対し、こちらは「すべて求める者は…」と無条件であることは注目すべきである。逆に、祈りの答（与えられるもの）の具体性について見ると、21章では、山が海の中に移るというような奇跡さえも含む「求めるものは、みな」（21・22）であるのに対し、この7章では、得、見いだし、あけてもらえる、との三つの動詞のうち、三つ目に「門」という抽象的な目的語が示されているのみである。このことは、この個所での強調点が、与えられる「良いもの」（11）自体にではなく、ご自身の民の必要を満たしてくださる「神の真実さ」に置かれているという

ことを示すと考えてよいだろう。

9〜10　パンや魚はガリラヤ地方の日常の食物である。パンを求めるのに、石を　**丸い石はパンに形が似ている。魚を求めるのに、へびを　**へびはガリラヤ湖に生息するうなぎ（律法によって食用を禁じられていた）の一種かもしれない。そんなものを子に与える親はいない。親は真実な愛をもって子の必要に応えようとするのである。

11　あなたがたは悪い者であっても…　**特別に悪い人ということではない。天の父の真実と比べたとき、すべての人は、たとえ親切な親であっても、罪深いのである。天にいますあなたがたの父はなおさら…　**下等なものに見いだしうる法則が、高等なものにさらなる蓋然性（がいぜんせい）をもって当てはまるという、ユダヤの一般的な論法。**良いものを下さらないことがあろうか　**「良いもの」は6・31〜33にあるような日常生活の必要を除外するものではないが、第一義的には、神の国の祝福という終末的な意味合いを持つものと言えよう。ルカははっきり「聖霊」（11・13）と記している。

12　だから　**ここまで語られてきたことを大前提として、黄金律が語られている点が非常に重要。何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ　**この黄金律は消極的な形式（〜するな）ではすでに知られていた。例えば紀元前後のユダヤ教師ヒレルは「あなたが憎むことを、あなたの仲間に行うな。これが律法の全体であり、その他のものはその注釈である」と教えた。しかしイエスが教えた積極的な形式（〜せよ）には、大きな意味の変化がある。キリストはまさに、積極的・自己犠牲的な愛によって律法を成就されたお方である。それゆえキリスト者の生き方も、常識的、律法的な地平から、律法の成就としての愛の地平へと飛翔するべきなのである。**律法であり預言者である　**これとは別に、もう一つイエスが律法の要約として示したのが、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイ22・39）である（レビ19・18参照）。この7章の黄金律はそれと別物ではなく、少しニュアンスの違った解釈であると理解して良いだろう。自分のして欲しいことを他人にもすることこそが、隣人愛に他ならないのである。そしてそれは、神から真実の愛をもって愛されているのだという実感があって初めて、人に与えうる愛なのである。

**参考文献　**4月1日分と同じ。

17日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ7・7〜12
タイトル　父なる神様に祈り求め続けよう
暗唱聖句　天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあろうか。　マタイ7・11
目　標　祈りに答えて良いものを与えてくださる天の父なる神を信じる。

導入

今日は父の日です。皆さんのお父さんはどんなお父さんですか？「優しいお父さんです。いつもよく遊んでくれるお父さんです。」と、いろいろ出てくるでしょう。でも皆さんのお父さん以上に、皆さんのことを良く知り愛して下さっているのが、天に父なる神様です。神様は、皆さんから離れないでいつでも一緒にいてくださる方です。今日は、天の父なる神様に心を向けましょう。

（飯田勝彦）

父なる神様に祈ろう

教会ではよくお祈りをしますね。皆さんはこのお祈りをどのように思っていますか？「何で祈るんだろう？」、「誰（だれ）に祈ってるんだろう？」、「祈りって必要なのかなぁ」などなど、祈りについていろんな疑問を持っているかも知れません。でも、それは大切なことです。正直に教会学校の先生に聞いてみてください。

イエス様は父なる神様へ祈ることを勧められます。それは、お祈りが神様との交わりだからです。皆さんはお父さんやお母さん、兄妹や友達と話をすることでいろいろなことを教えられたり、励まされたりするでしょう。そのように人との関わりにおいて成長していきます。

神様は皆さんと交わることを喜ばれます。嬉しいときも辛いときも「天の父なる神さま…」と祈ってみましょう。祈りを通して神様と交わる中で成長して行きます。

父なる神様は良いものを下さる

11節を一緒に読んでみましょう。神様は何を下さると言われてますか？「良いもの」です。では、この良い物ってどんなものだと思いますか？

ここでイエス様は、たとえ悪いお父さんであっても自分の子供には良い贈り物をすると言われます。皆さんは自分の誕生日にお父さんから「何が欲しい？」と聞かれたことはないですか？　父親は自分の子どもを愛しているので、子どもが喜ぶ物をあげようと努力します。でも、

お父さんは皆さんの欲しい物は何でも与えてくれるでしょうか。例えば、お父さんに「本物の拳銃が欲しい」と言ったらお父さんはそれを与えてくれるでしょうか？お父さんは、あなたに欲しい物だけを与えるわけではありませんね。あなたにとってためにならないと思う物を与えることはしません。なぜなら皆さんを愛しているからです。

それは父なる神様も同じです。神様は皆さんにとって良いものを知っておられます。

父なる神様に祈り続けよう

イエス様は、父なる神様に「求めなさい。探しなさい。たたきなさい」と言われます。一言で言えば「熱心に祈り求めなさい」ということです。

皆さんはお店で小さな子供がお父さんやお母さんに「これ買って！　これ買って！」と泣きながらねだっているのを見たことないですか？　まさに熱心に求めている姿です。今、皆さんがそれほどまでに求めているものがありますか？

父なる神様は、皆さんに必要であればそれを良いものとして与えてくださいます。この良いものとは「物」だけではありません。嬉しいことや悲しいこともあるでしょう。嬉しいときは「神様、こんなに嬉しいものを与えてくださって感謝します」と祈れるでしょう。でも悲しい出来事は良いものとして受け止めることは難しいですね。ときに神様は、悲しいと思われるような出来事を通して皆さんを成長させようとされます。皆さんにとって「良いもの」と思えるものと、父なる神様があなたにとって「良いもの」と思われるものが違うときもあるのです。

神様はあなたに最高のものを与えたいと願っておれます。それは、救い主イエス・キリストです。皆さんはイエス様を熱心に祈り求めていますか？　イエス様の中には私たちの心を満たせるすべてのものが含まれています。

まとめ

父なる神様は、皆さんの願う以上の良いものを与えようとしておられます。神様がくださる良いものを祈り求めましょう。父なる神様は祈りに必ず答えてくださいます。

♪神さまかんしゃします♪（ホ119）

聖書　列王上3・16〜28
テーマ　ソロモン王の知恵

（鎌野善三）

序論

今週は、「サムエルと王たち」の単元の5回目として、紀元前960年、若くしてダビデ王の継承者となったイスラエル王国3代目の王ソロモンに焦点をあててみよう。彼の知恵がどのようなものであったかを示す逸話が、今日の聖書個所に記されている。

一、公平にさばく知恵

こともあろうに、普通の人々ではなく、〈ふたりの遊女〉が王のもとにきたことに留意したい。長老や役人では解決できない難しい問題だったゆえに、王の最終判断が求められたのだろう。当時の社会にあって、遊女は決して芳しい職業ではなかったにもかかわらず、しかも、このように最高権力者である王に直接訴えるシステムができていたことは驚きだ（これらの点では、江戸南町奉行だった大岡越前守の似たような裁判の話とかなりの違いがある）。そして王は彼らの訴えを真剣に聞き、何ら差別することなく公平に対処した。

二人の話を聞いたとき、王は、どちらがうそを言っているのか、その口調や表情である程度分かったかもしれない。しかし王は、主観的な判断で安易にさばきを下さなかった。正しく、公平にさばくために、知恵を用いたのである。

二、愛に基づく知恵

遊女にとって、妊娠することは決して喜ばしいことではなかった。父親は不明なので一緒に住めず（だから家には彼女たちしかいなかった）、育児の経済的負担をどうするか、心配していたかもしれない。しかし二人は様々な困難を克服して、出産にまで至った。二人とも生まれた赤ん坊を愛していたはずである。だからこそ、一方の女は自分の不注意で赤ん坊を死なせてしまっても、あきらめきれずに、取り替えたのだ。しかしそれは赤ん坊を自分のもの、自分の所有物と考えることであり、正しい愛の姿ではない。

王が〈生きている子を二つに分けて、半分をこちらに、半分をあちらに与えよ〉と命じたとき、本当の母は、〈生

きている子を彼女に与えてください〉と叫んだ。赤ん坊が生きていてさえくれたら、たとい自分が育てることができなくても良いと思ったからだ。それこそが正しい愛である。逆に、〈わたしのものにも、あなたのものにもしないで、分けてください〉という女は、赤ん坊を物のように考えていた。万が一、この女が本当の親であったとしても、彼女は赤ん坊を正しく育てることはできないだろう。王は、赤ん坊に対する母親の愛を信じて、このようなさばきをしたのである。

三、神から与えられた知恵

〈イスラエルは皆王が与えた判決を聞いて王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである〉。ソロモンの知恵は、彼自身から出てきたのではない。それは神から与えられたものだった。即位の直後、主が夢に現れたとき、彼は自分が「小さい子供であって、出入りすることを知りません」（7）と、その未熟さを認め、「自分のために長命を求めず、また自分のために富を求めず、また自分の敵の命をも求めず、ただ訴えをききわける知恵を求めた」（11）。主がその求めに応えて知恵を与えられたからこそ、遊女であっても公平に、また彼らの中にある愛を信じて、さばくことができたのだ。

自分の無能を知り、神の力に信頼することこそが信仰である。ソロモンが生涯、この信仰を持ち続けたなら、イスラエルの歴史は違ったものになっただろう。しかし彼は、周囲の国々の王女たちを妻としたため、晩年、「その妻たちが彼の心を転じて他の神々に従わせた」（11・4）。政略結婚は、信仰を否定することだったのである。

結論

ソロモンの知恵は確かにすばらしいものだった。しかし主イエスは、「ソロモンにまさる者がここにいる」（マタイ12・42）と仰せられた。確かに、「キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵」となられた（Ⅰコリント1・30）。主イエスを信じる者こそ、ソロモンにまさる知恵者である。謙遜（けんそん）にこの知恵を求め続けようではないか。

研究資料

（石田高保）

「ソロモンの知恵」と人の口にものぼるように、ソロモンが知恵ある王であったことは一般的にも知られている。そこから神話化されてソロモンは不思議な指輪を持っており、それによってどんな動物とも話しができたという伝説も生まれたほどである。今日の個所は、彼に授けられた神の知恵を具体的に伝えるエピソードである。彼は最高裁判官として実際にはおびただしい事例があったであろう。ソロモンの手によると言われている蔵言にも、その賢明さが遺憾なく表されている。

テキスト

16　ふたりの遊女が王のところにきて、王の前に立った　王の前とは、いわば最高裁判所である。長老や役人たちがつかさどる下級裁判所では取り扱いかねる難題であったことがうかがえる。遊女でも王に訴えることができたほど、王の裁判はすべての人に開かれていた。イスラエルの王は、士師時代の「さばきづかさ」が発展したもので、行政、司法、軍事を長老たちの助言のもと、一元的に掌握しており、その責任を主なる神に負っていた。

17　ああ、わが主よ　王を神様扱いしているわけではなく、「わが王様」と敬意を表す呼び方である。

18　わたしたちは一緒にいましたが、家にはほかにだれもわたしたちと共にいた者はなく、ただわたしたちふたりだけでした　当事者である二人以外に目撃者や証人のいない事態なので、裁判は困難を極める。

20　はしための眠っている間に、わたしの子をわたしのかたわらから取って、自分のふところに寝かせ…　自分が目にしていないことであるにもかかわらず、相手の仕業であると決めつけているのは、母親としての直感が働いたからであろう。

22　彼らはこのように王の前に言い合った　二人の口論が激しさを増し、水掛け論となり、第三者にとっては、当事者以外に証人がいないので、通常手の施しようがない。ところがソロモンには、それを見分ける力があった。

24　そこで王は「刀を持ってきなさい」と言った　当事者の言葉だけでは判断できないと見た王は、その場にいる誰にでも分かる方法で裁きをつけようとしている。

25　生きている子を二つに分けて、半分をこちらに、半

分をあちらに与えよ　ソロモンは、経験的にもわが子に対する母親の気持ちはどんなものであるかをわきまえていたのであろう。この言葉が事の真偽に決着をつけることになる。神の知恵を受けたソロモンの面目躍如である。

26　すると生きている子の母である女は、その子のために心がやけるようになって　直訳としては、「彼女のはらわたは熱くなった」。実の母は、わが子が殺されるくらいなら相手の女に渡してでも生きてくれるほうがましだ、という断腸の思いで王に進言した。一方、相手の女は、**それをわたしのものにも、あなたのものにもしないで、分けてください**　と冷たく言い放った。つまり赤ん坊は死んでもかまわないという意味である。ソロモンは、このような二人の反応の違いをあぶり出すことによって、本当の母親を見抜くことができた。まさに「王のくちびるには神の決定がある、さばきをするとき、その口に誤りがない」（箴言16・10）とあるとおりである。

28　イスラエルは皆王が与えた判決を聞いて王を恐れた　これは人間の能力を超える判決であったので、一同はソロモンに神の知恵が授けられていることを悟った。また、どんな悪事もソロモンの前ではあばかれてしまうという神への畏れを抱いた。神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである　ソロモンは事実、状況や前後関係に対する霊感された洞察力をいただいていたと言えるだろう。新約的に言えば、これは御霊の賜物の「知識の言葉」に当たるかもしれない（Ⅰコリント12・8）。正しい裁判をすべき王として、「聞きわける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ」（9）、「訴えをききわける知恵」（11）が、彼の求めに従って与えられたと見るべきであろう。そのほか、ソロモンの知恵に関する聖書の記述は以下のとおりである。「神はソロモンに非常に多くの知恵と悟りを授け、また海べの砂原のように広い心を授けられた。ソロモンの知恵は東の人々の知恵とエジプトのすべての知恵にまさった。…彼はまた蔵言三千を説いた。またその歌は一千五首あった。…諸国の人々はソロモンの知恵を聞くためにきた。地の諸王はソロモンの知恵を聞いて人をつかわした」（4・29、30、32、34）。

参考図書　『ティンデル聖書注解』、『実用聖書注解』。

聖　書　列王上3・16〜28
タイトル　ソロモンの知恵
暗唱聖句　神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである。列王上3・28
目　標　神様からの知恵によって生きる者となる。

導入

最近の小学生は勉強、大変みたいですね。英語やコンピューターも習ったり。今の世の中を生き抜くために、「スーパーこども」を育てようとしてるそうです。

そういう学校のお勉強がよく出来ることも大切かも知れませんが、でももっと大切な知恵があるんです。それは「神様から与えられる知恵」「神の知恵」です。それはどういう知恵かと言うと、神様の前に何が良いことか、悪いことか、何が本当か、ウソか、今、何をするべきか、しないべきか、などを判断することが出来る知恵です。

今日出てくるソロモン王は、ダビデ王の息子の一人で、ダビデ王の後をついでイスラエルの王になりました。でも王様って大変です。国を正しく治めなければなりません。そこでソロモン王は、イスラエルの国民を正しく治められるように、神様に知恵を求めました。神様はその祈りに答えて、ソロモン王に素晴らしい知恵を与えてくださったのです。

（土屋開夫）

二人のお母さん

ある時、二人の女性がソロモン王のもとにやってきました。この二人は今で言うルームシェアみたいに同じ家に住んでいました。そして同じ頃にそれぞれ赤ちゃんを産みました。ところが夜寝ている間に、一人のお母さんは抱いていた小さな赤ちゃんの上に乗っかってしまって、その赤ちゃんはかわいそうに死んでしまいました。ところが赤ちゃんを死なせてしまったお母さんは、死んだ自分の赤ちゃんと、もう一人の生きている赤ちゃんをこっそり入れ替えたというのです！

この二人のお母さんが「生きているのが私の子です。死んだのはあなたの子です」、「いいえ、死んだのがあなたの子です。生きているのは私の子です」と言い張るのです。いったい、果たしてどっちの言うことが本当で、どっちがウソなのでしょう？

神様から与えられたビックリする知恵

この時、きっとソロモン王は心の中で祈ったことでしょう、「神様、知恵を与えてください。真実を教えてください」と。そしてソロモン王は刀をもって来させ、「生きている子を二つに分けて、半分をこちらに、半分をあちらに与えよ」と命じました。なるほど、赤ちゃんを半分ずつに分ければいいのか… えーーー?! そんなことをしたら赤ちゃんが死んでしまいます！

すると、その赤ちゃんの本当のお母さんは叫ぶように言いました、「生きている子を彼女に与えてください。決してそれを殺さないでください」と。ところがもう一人のお母さんは言いました、「それをわたしのものにも、あなたのものにもしないで、分けてください」と。

この二人の言葉を聞いたら、どっちが本当のお母さんか、みんなにも分かりましたよね。そう、赤ちゃんを殺さないで、と叫んだ女性が本当のお母さんですね。ソロモン王は勿論、赤ちゃんを本当に殺すつもりはありませんでした。本当の心を知るためだったのです。

我が子を本当に愛する母親の愛の心と、悔しさと妬ましさからウソをついたり、人のものを奪おうとする罪の心、それをちゃんと見分ける知恵を、ソロモン王は神様から与えられたのですね。このソロモン王の判決を聞いた人たちは驚きました。「神の知恵が彼のうちにあって、さばきをするのを見たからである」（28）。

まとめ

ソロモン王は旧約聖書の箴言の多くの部分を書きましたが、その1・7に「主を恐れることは知識のはじめである」とあります。私たちの父なる神様は、何でも知っておられ、何でも出来る「全知全能」の神様ですね。この神様を信じている、知っている、そしておそれ敬って礼拝している…、そのことがもっとも大切な知識、知恵だということです。

みなさんも毎日生きていく中で色んなことにぶつかるでしょう。「あー本当に困った。一体どうしたらいいんだろう」。そんな時は慌てないで、恐れないで、「神様、どうしたらいいでしょう。知恵を与えてください」と祈ってください。すると心が落ち着いてきて、やがて光が差すように神様からの知恵が与えられてきますよ。

♪主の教えを喜びとし♪（岩渕まことソングブック）

二〇一八年度 カリキュラム解説

今年度は、三年カリキュラムの二年目となります。以下、今年度カリキュラムの概略についてご紹介致します。

なお、今年度カリキュラムや三年分の新カリキュラムは、教会教育室ホームページからダウンロードして頂けます。適時ご利用ください。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、サムエル記からエステル記まで（単元「サムエルと王たち」）とヨシュア記（単元「ヨシュア」）、詩歌と呼ばれる諸書（単元「詩歌」）を扱います。ヨシュア記の学びは、時代的に戻る形ですが、年明けに置かれ、年間行事カリキュラムも兼ねています。単元「サムエルと王たち」は、イスラエル・ユダ王国の歴史（捕囚期含む）からの学びです。教師の側でも歴史的経緯をよく頭に入れた上で、お話しください。詩歌は、文学形態を踏まえた上で、語られている内容を分かりやすくお伝え頂くとよいでしょう。

②新約聖書

新約聖書は、単元「復活」（前年度カリキュラムからの継続）以外は、ルカによる福音書を中心に学びます。単元「キリストと出会った人々」「キリストの譬話」に続き、「クリスマス」単元をはさんで、単元「キリストの十字架への道」へとつながります。聖書辞典等でルカによる福音書全体の特徴を確認しておくとよいでしょう。

③教会暦・年間行事によるカリキュラム

昨年度末の単元「十字架への道」に続き、今年度初めには、イースターに合わせて、単元「復活」が置かれます。また、年末には、収穫感謝の日を含め、単元「クリスマス・年末」が置かれます。

④テーマ「キリストの救いを知る」（マルコ1・15）

今年度のテーマは、「キリストの救いを知る」です。福音書その他の学びの中でも、キリストの救いを扱っています。加えて、夏のキャンプ時期に合わせて「救い」というテーマ単元を設けました。一人ひとりが確実にキリストの救いに導かれますよう、この一年、祈りつつお取り組みください。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

＊分級用に、ワークA（幼稚科向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円＋税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
http://cs.jccj.info/

＊ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3－3－19
電　話（078）575－5511
ＦＡＸ（078）575－6611

―おわりに―

『牧羊者』二〇一八年度第Ⅰ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

教師養成講座は前号に引き続き、川原﨑晃師による「日本宣教の歴史（2）」を、二〇〇七年度Ⅳ巻から再掲いたしました。「牧羊ひろば」は休みました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解　石田高保師　小泉　創師　金井信生師
研究資料　福井文彦師　鎌野善三師　大頭眞一師
　　宮澤清志師　小平徳行師　辻林和己師
　　金井由嗣師　石田高保師　中島啓一師
メッセージ例　松浦みち子師　飯田勝彦師　土屋開夫師
ワーク（A）　後藤　真師　和田牧子師
ワーク（B）　鎌野　幸師　吉田美穂師
　　山下大喜師　三輪直子師　竹崎光則師
　　勝田幸恵師　野勢かほる師
（C）　上森恭子師　田中裕明師　勝田幸恵師
中高科へのヒント　後藤健一師　三輪正見師　石田高保師
子ども聖書日課　田中愛子師　金田ゆり師　小野淳子師
フラッシュカード　丹羽　遥姉　松浦あん姉　佐藤由香姉
　　後藤栄子師　加藤　満師
み言葉カード・イラスト　松浦あん姉　佐藤由香姉　後藤栄子師
ワープロ打ち込み　多田豊子師
校　正　加藤　清師　山田和幸師　中島啓一師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（中島啓一）

聖書教育教案誌
牧羊者
二〇一八年度　Ⅰ巻
二〇一八年四月一日発行
発行所　日本イエス・キリスト教団
企画監修　日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三―三―一九
電話（〇七八）五七五―五五一一
ＦＡＸ（〇七八）五七五―六六一一
印刷所　菱三印刷株式会社
電話（〇七八）五七六―三九六一
＊日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み